

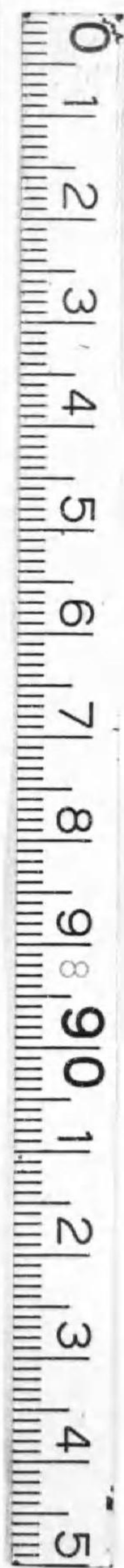
肉の付面

大河内翠山

特 219

783

集



始



特219
783



讀切集



明 正 堂



肉付の面

(一) 井筒の舞
名人と名人

現今でも語は中々盛に宣傳もされ流行もしてゐるが、能は餘り發展しないやうである。其能の盛大を極めたのは徳川幕府の頃で、觀世金春喜多寶生などといふ皆一流の能役者があつた。就中觀世太夫は名人の聞えを取つた人であつた。總て藝術は其の極致に達すると、言つて言へず、言はせて言へずといふ不思議がある。之を妙といふ。或る年將軍上覽の能の催しがあつた時に、觀世太夫が井筒の能を舞つた。其時に有名な劍客小野二郎右衛門も拜見を許されて其の席に在つた。小野二郎右衛門はいふまでもなく前名神子上典勝といつて、一刀流の祖、伊東彌五郎友景入道一刀齋の門人となつて一刀流を學び、後小野派一刀流といふ一派を編出したほどの刀術の名人であつた。其當時は徳川

目次	
肉付の面	一
女達磨	四九
縷斗菜の花	九七
蚤女のお舟	一二〇
烈女千鳥	一五六

春長施布幘裝

將軍の劍術の師範をして居た。其小野二郎右衛門が其の席に列なつて拜見をして觀世太夫の舞を熱心に見て居た。ト觀世太夫が舞ひながらに井筒の中をヒヨイと覗いた。其の時に二郎右衛門が「此處だツ」と大きな聲で言つた。其の席に在つて拜見を許されて居た人々は驚いたが、將軍の御前であるから別に尋ねる者も咎める者もなかつた。

能が終つて後に將軍が小野二郎右衛門を招んで

「其方は先刻觀世が井筒を覗いた時に、此處だと大聲を發したが、あれは如何いたした譯であるか、其理由を申せ」と訊いた。二郎右衛門ニツコリ笑つて

「甚だ御耳障り恐れ入りましたでございますが、總て藝は其の極に至りますと、身體に隙といふものがございませぬ、體に隙の見えまするのは、未だ其の技が極意に至らぬ觀世、先刻觀世太夫が井筒の能を舞ひまするのを手前拜見いたして居りましたが、身體に卵の毛で突いたほどの隙もございませぬ、あはれ一太刀付けやうと存じましても其の隙を見出すことが出来ませぬ、二郎右衛門殆ど感服いたしました、成程觀世は當代の名

人、恐れ入つたものであると、感に堪へて拜見いたして居りました所、井筒を覗きました時に、身體に隙が現はれました、秘こそ一太刀付けるは此處だと存じまして、我れ知らず此處だと大聲を發しました次第、お耳を驚かせまして、甚だ恐れ入りましたでございます」述べた。將軍之を聽いてハタと膝を打つて

「流石は其方は武術の名人、實に感服をいたした、能を見物して居りながら武の一字を忘るゝ暇がない、それほどに心を用ふればこそ日本一の武藝者といはるゝほどの腕前になつたのであらう、感服の外はない」と口を極めて二郎右衛門を賞めた。それから直ぐに觀世を招んで「其方先刻舞ひながら、井筒の中を覗いた時に、身體に隙が現はれたといふことであるが、どういふ理由であるか」と尋ねた。觀世太夫は手を仕いて

「御意にござります、井筒を覗きますと、中に一枚の白紙が落ちて居りました、何で此の中に白紙が落ちて居るか、それに心を奪はれまして、それが爲めに隙を生じたものと相見えます」

「ウム左様か、それで相分つた、其方は日本一の能の名人ぢや」と賞められて観世太夫は非常に面目を施した。

此位の名人であるが観世太夫は、一つの瓊瑤といふのは酒の上の悪い事であつた。酒癖のある人は癖が高い。一度言ひ出すと後へは退かない。俗にいふ負けず根性。此の負けず根性が観世太夫をして熱心に修業をさせて名人といはるゝほどの藝術家になつたものと見える。

(三) 般若の面を買ひ

ト茲に京橋三十間堀に面打の源五郎といふ者があつた。面を打たせては源五郎に及ぶものはあるまいといはれるほど腕が好かつた。能の面は源五郎の打つたのでなければ用に立たぬといはれて、観世、金春、喜多、實生の各家元へ出入をして居た。斯ういふ良腕であるから、精を出して職を勤めれば生計も裕福になるのであるが、昔も今も腕の出

来るに人に限つて怠け者が多い。それは腕が良いだけに其の腕に自信があるから、何時でも一つ腕に擦を掛ければ、平素怠けてゐるだけのことは取返すといふ氣があるから、どうしても怠け勝になる。源五郎もそれに漏れず、腕が良いだけに、矢張り仕事をするのは月に五日か七日、跡はブラ／＼して近所を酒を飲んで歩いて居る。偶に家に居るかと思ふと、飲友達を引ッ張つて来て、夜の更けるまで飲んで居るといふ有様、是では生計が裕福でありやう譯がない。貧窮は容赦なく侵入して来て、其の日の生計にも困るやうになつて来た。女房のおかつとの間に源之助といふ今年十二になる男の子があるが、自分分は素より妻子にも満足な衣服一枚着せることが出来なかつた。いつも一張羅を着た切りの始末であつた。それでも源五郎は相變らず盃を放さなかつた。源之助はまだ子供でもあり、男の子であるから平氣だが、女房のおかつは女のことであるから、時には堪り兼ねて意見をするけれども、女房の意見を聞くやうな男ではなかつた。

「黙つてろ煩せえ、稼ぐ時には稼ぐ、氣の向かねへ時に仕事をしたつて何が出来るもの

か……」

「だつてお前さん、さうして毎日遊んでばかり……」

「煩せえツてえに、愚圖々々いふな、何といふとツベコベ吐しやアがる、笹棒めえ、其内に気が向けば細工場へ坐り直つて、腕に熱を掛けて仕事をすりやア直ぐに金は諸方から集つて来るんだ、愚圖々々言はずに酒でも買つて来い」頭からガミ／＼と怒鳴り付けてしまふので、女房も仕方がないと思つて黙つてしまふのが常であつた。

ト觀世太夫から般若の面を打つてくれといふ注文があつた。是は言ふまでもない、源五郎の腕の良い事を知つて居るから觀世が注文をしたものと見える。源五郎は手付の金を貰つて引受けた。けれども例の意け癖で三年ばかり抛擲らかして置いた。觀世からは二三度催促があつたけれども、まだ出来ない／＼といふので、觀世の方でもそれツきり催促にも來なかつた。

スルト丁度盆の十三日のことであつた。

「ちよいとお前さん」

「何だおかつ」

「何だちやアない、今日は幾日だと思つてお在だえ」

「ナニ幾日だと思ふ……笹棒めへ、齋稼をしやアしめへし、月日を忘れる奴があるものか、今日は七月の十三日よ」

「それほどお前さん知つてるなら、酒ばかり飲んで居ないで、少しは仕事をして呉れたらどうだえ、お盆が来るちやアないか、世間の交際だつて平素と違つて知らぬ顔も出來ないし、第一洒坊だつてあの態を御覽な、乞食の子と間違へられさうな服装をして居るちやアないか、大勢子供があるといふなら仕方がないけれども、唯一人の子供があんな態をして居るのを、お前さん可哀想だとは思はないかえ、出來ないなら仕方がないが、取れる腕を持つて居ながら飲んで遊んでばかり居て、本當に困つちまうちやないか、三年跡に觀世様から頼まれた般若の面を拵へて上げれば、直ぐに後金が入つて來る

のだから、仕事をして呉れたらどうだえ」

「又始めやアがつた、よく愚圖々々吐しやアがる、けれどもそんなにいふなら仕方がねへ、宜しく平素と違つて盆のことだ、手前のいふ通り浮世の義理で、極る所は極めて置かねへと世間へ面出しが出来ねへ、源坊に小ざつぱりした單衣の一枚も着せてやつて、盆の小遣もやらう、何にもいはなくても宜い、ドレ小遣取りをしやうか」と源五郎も女房が愚痴をいふのも尤もだと思つたから、直ぐに細工場へ入つた。

聽て細工にかゝると腕前の出来る人だから何でもない。間もなく少しばかり懸掛けて抛つて置いた般若の面を打上げて、それを持つて細工場から出て来た

「源之助、源之助」と呼ぶと、俵の源之助は其所へ来た。

「何だえお父さん」

「お前木挽町の観世様のお屋敷を知つて居るか」

「ア、知つてゐるよ、先に一度行つたから……」

「さうか……ちや観世様へ之れを持つて行つてな、大きに遅くなりまして申譯もございませぬ般若の面が出来ましたから持つて出ました、どうか御勘定を頂きたうございませうつてな、叮嚀にいふんだぞ、それから金を貰つたら落さねえやうに能く氣を付けて持つて来い」

「アイよ、大丈夫だよ」

「それから往に酒屋へ寄つてな、酒を二升家へ持つて行つて呉れと聲を掛けて、歸りに鱧屋へ寄つて、鱧の井を三つ、それに魚金へ寄つて、何かあつたら持つて来て呉れと然う言つて来い」と言つてゐる父の顔を源之助はヂツと見てゐたが、

「お父さん、又お酒を飲むのかい」

「又飲むかといつて、乃公は酒を飲まねえと何時言つた」

「それでもさ、まだ観世様からお金が取れるか取れないか分らない内に、モウ飲むことを先に考へてゐるからさ、お父さんにも困つたものだなア」

「生意氣なことをいふな、阿母のいふことを聞いて居やアがつて、碌なことは言はねへ、愚圖々々いはねへで早く行つて来い」

「アイよ、今行つて来るよ」

面を風呂敷に包んで、それを持って源之助は、三十間堀の家を出て、程近い木挽町の觀世太夫の家へ来た。又關へ来て

「お頼み申します」といふ聲に應じて二十四五の門人らしい男が出て来た。

「何所から参つたな」

「ハイ、面師の源五郎の所から出ました」

「ア、源五郎の家から……さうか」

「先達て御注文になりました面が出来ました、大きに遅くなつて相済みませぬが、どうか宜しく仰しやつて、御勘定を頂きたう存じます」十三の子供にしては源之助は口の聞き方がませて居たが、愛嬌があるので少しも高慢らしく聞えない。

「ア、さうか、大きに御苦勞ノ。サア此方へ面を出した。……此處へ上つて待つていなさい。」

又關の次の間へ源之助を上げて置いて取次の男は、面を持って奥へ来た。丁度其の時觀世太夫は酒を飲んで居た。

「申上げます」

「何ぢや」

「只今面打の源五郎の所から面が出来て参りました」

「さうか」差出した般若の面を手に取り上げて見ると良く出来て居る。

「ウーム、源五郎は巧いものだ、成程……」折返し見居たが、此の觀世太夫は前にも記したやうに酒癖が宜くない。酔ふと良い事でも其の儘では済まない。何か悪くはないと腹の虫が納まらないといふのだから、餘程酒癖の質が悪いと見える。

「巧く出来てゐる。巧く出来てゐるが、此の般若の面は三年前に申付けたものだ、それ

を忘れた今時分になつて持つて来るといふのは怪しからん奴だ……ハ、ア何だ、源五郎めは、盆で幾らか金が入るので、慌て、拵へて持たせて遣したものと見える、是れが盆でなく、普通の目なら持つて来る奴ではない。怪しからん奴だ……さう思へば慌て、打つたと見えて、此の面は何所かに手疎りがある、將軍の御前へ出て、能を致す大切の面、觀世大夫ともある者が、斯様な不出來の面を着けて出られるものか、源五郎といふ奴、沙汰の限りの奴だ」言はずとも宜いことをいひ、怒らずとも宜いことを怒るといふのが酒癖のある人の持前。口で小言のやうに言つてゐる内は宜いけれども、口で言つてゐる内にムラ／＼として来て

「斯様な粗末な面を着けて上様の御前へ出られるか、馬鹿者めツ」と噓んで吐き出すやうにいつて其の般若の面を傍の板の間へ叩き付けた。普通なら板の間へ叩き付けたらゐで割れるものではないが、怒りに任せて叩き付けた機會に、バツと面は二つに割れた。「ソレ見る、落してさへ此のやうに二つに割れる……三十郎」

「へ、ッ……」取次の男も觀世大夫が例の癖が始まつたなと思つたから其所へ小さくなつてしまつた。

「何故此んなものを取次ぐのだ、此のやうな面が役に立つと思ふか」

「ハツ、どういふものでございませうか」

「馬鹿者め、どういふものといふことがあるか、此のやうな不出來の面を着けて將軍家の御前へ出られるか、斯様な疎末な物は用ゐにならぬ、手附の金は要らぬから以來當家へ出入はならんと申して使の者を追拂つてしまへ」

「ハ、ッ……、大變々々」頭を抱えて取次の男は、二つに割れた面を持つて女關へ出て來た。

「小僧々々」

「ハイ……」

「誠に氣の毒だがな、旦那様へ差出した所、此んな疎末な彫り方をした不出來な面を着

けて、上様の御前へ出られるか 持つて歸れ、手附の金は要らぬから以來當家へ出入はならぬといつて、以ての外のお怒りだ、歸つて親父によくさういふが宜い」

「ハイ……」

「全體どうも念を入れて拵へれば宜いものを、何だらう、話を聞くに大分お前の親父は飲酒家ださうだから、酒にでも飲ひ酔つて拵へたんだらう、以來餘り酒は澤山飲まんやうにするが宜い、親父に意見をしろ、サア持つて歸れ」

「ハイ、それではお用ゐになりませぬか」

「お用ゐになる所ぢやアない、大變な御立腹で、公方様の前へ此んな物を面へ着けては出られぬと仰しやつて、二つに割つてしまつた」

「エ、ツ、割つておしまひなすつた」

源之助は風呂敷を解いて、中から出して見ると面は眞二つになつてゐる。

「ひどいことをなさるぢやアございませぬか、御意に入らんければ入らないで仕方がな

い、何も割らなくつたつて宜ささうなもので、餘りといへば亂暴なことをなさいます」

「乃公に向つて理窟を言つたつて仕方がない 旦那様はな、今日は大變酔つていらつしやる、折の悪い所へ貴様が持つて來た、全體誂へてから三年も経つ、忘れた時分に持つて來るといふのは、餘り物が横着過ぎる、どうも仕方がないから、歸つて親父にさう言へ、遣はした手付の金はやるといふことだから、それを持つて歸るが宜い」

「ハイ……」源之助はチツと割れた面を見詰めて居たが、眉はビリ、と動いた。

「御氣の入らないものは仕方がございませぬ、けれども二つに割つてしまふといふのは、餘りといへば情けない仕方、そんなお方から假令幾らのお金でも、やると仰しやつても唯お貰ひ申すのは誠に厭でございませぬから、貴下の方でやると仰しやつても、必ずお返し申します、併し今直ぐに返せと仰しやつたつて、お父さんは貧乏で三文の錢もございませぬから、今お返し申す譯にはなりません、私が今に大きくなつて、けるやうになると、屹度其のお金はお返し申します、どうぞ然う仰しやつて下さい、御氣に入

らなければ氣に入らないと仰しやればそれで済むものを、二つに割つてしまふといふのは亂暴なこと、觀世太夫も糞もあるものか、受取つた手付の金を返してしまへば恩も何もない、預かつたお金は屹度今にお返し申しますから、どうぞさう仰しやつて下さい」段々源之助の語氣は荒くなつて行つて、キリ、と齒を嚙んだ。子供の心にも觀世太夫の仕打が口惜いと思つたのである。取次の男は眼を圓くして

「えらいことを言ふな小僧、宜い加減にしろ、旦那様は酔つて在つしやるからな、そんなことが聞えやうものなら殿られてしまふ、痛い思ひをしては詰らない、サア早く歸れ、旦那様は酔つてゐるから仕方がない、どうも飲酒家は始末の悪いものだ、貴様の親父も矢張り飲酒家だからそんな事が出るのだ、以來酒を飲まないやうにしろと親父にさういへ、氣の毒だが早く歸つたが宜い」

「歸りますよ……仕方がないから歸ります 屹度手付の金は成人の後にお返し申しますから、宜しく其事を仰しやつて下さい」源之助の双頬には涙が流れてゐる。

「小僧、貴様泣いてゐるな」

「泣きやアしませぬ……左様なら」袖で涙を拭つて源之助は觀世太夫の門を出た。

(三) 子供の意見に圓い決心

源之助は體て家へ歸つて來た。源五郎は膳に向つて酒を飲んで居たが、源之助の顔を見ると、今まで歸つて來るのが遅いのを腹を立て居た所だから

「何をして居たんだ」頭から打つけるやうに怒鳴つた。

「又途中で遊んで居やアがつたんだらう、どうした金は」

「……」源之助は怨めしさに父の顔を見詰めた。

「何だつて人の面を見て居るんだ、どうした金は落しやアしめへな」

「落しやアしないよ」

「落しやアしなけりやア宜い、歸りが遅いから心配をして居たんだ……歸りに鰻屋と魚

「お父さん、冗談いつてはいけないよ」

「何が冗談だ」

「お父さん又お酒を飲んで居るんだね」

「飲んだつて宜いちやアねへか、手前の歸るのを待つて居たんだ、鰻と肴の來るのが遅いので酒が旨くねへ、早く持つて來いと然う言つて來たか」

「情けないなア」源之助は心から情けないやうに言つた。

「情けない……何が情けないんだ」

「お父さん、鰻も肴もない、あの持つて行つた面は納まらないよ」

「ナニツ、納まらねへ……笹棒めへ、乃公の打つた面が納まらねへなんてことがあるものか、どうして納まらねへのだ」

「どうしてといつて、親世様へ持つて行つた所が、こんな不出來な面を着けて、將軍様

の前へ出る譯には往かない、手付の金はやる、持つて歸れといつて、お父さんが拵へた面を眞二つに割つてしまつた」

「エ、ツ、面を眞二つに……」源五郎の顔の色はサツと變つて、思はず盃を下へ置いた。

「アム、其の二つに割つた面を弟子に持たせてよこして、全體貴様の親父は平常酒ばかり飲んでゐるから此んな面を打つのだ、役に立たないから此んな面は持つて歸れと、散にいはれて歸つて來た……お父さん、幾ら不出來だつて二つに割るといふことはない、言つてやつたけれども、割つてしまつたものは仕方がないと思つて、口惜いけれども歸つて來た……ねエお父さん、後生だから是から酒を飲まないで、一生懸命に精を出して仕事をしてお呉れ、私は口惜くつてならない、言はれなくても宜いことを人にいはれて、残念でく堪らないが、お父さん、お前口惜いとは思はないかい、貴様の親父は酒に心を奪はれてしまつて仕様のない奴だと散々言はれて來た、どうか酒を飲まない

で、頼むから潜出して仕事をして呉れ」いつてゐる内に兩眼からは涙は頬に傳はつて落ちる。源五郎は腕を拱いた儘黙つて源之助の言ふことを聞いてゐた。聽て二つに割れた般若の面を手にとつてチツと見て居たが、グツクリしたやうに前へ投出した。

「さうか。……源之助、お前のいふことは尤もだ、三つ子に聞いて淺瀬を渡るといふのは此の事だ、成程、毎日々々酒ばかり飲んで居たので、乃公の腕が鈍つたのだらう……酒を飲んだのが悪い、モウ酒は飲まねへ、酒は飲まねへ」熱々と言つて、前にあつた職をズイと突出した。

「源之助、お父さんの、今日限り酒は禁める。決して飲まねへから安心をして呉れ、酒を禁めて一生懸命に仕事をする……アア、子供に意見されて面目ねへことだ……おかつや」

「ハイ……」

「今聞く通りの譯だ、勘忍して呉れ、是からは乃公は生れ變つて一生懸命に仕事を隠む

から、今までの事はどうか勘忍して呉れ」心から言つて女房と子供の前へ兩手を仕いた。斯うした様子を見ると、夫婦の情であるからおかつは堪らなくなつて

「何だねへお前さん、女房や子供の前へ手を仕くことがあるものかね……今までの事は仕方がない、モウそんなことをクヨクヨ思つたつて取返しが付く譯ぢやアなし、それほどにお前さんが氣が付いたら、是からスツカリ了簡を入れ直してお呉れなら是れほど有難いことはない、心配なことはないんだから、サア機嫌を直してお呉れ……源坊や、御苦勞だつたね、モウ宜いよ、お父さんもあゝいふし、心配をすることはないから、何所かへ行つて遊んでお出で」

源之助を次の間へやつて、萎れてゐる良人を慰めやうと思ふから、突きやつた職を元の通りに直して

「サアお前さん、好きなお酒なんだから、至ツきり禁めると却つて毒、今までのやうに酒に飲まれなかりやア宜いんだから、少しでも飲んだ方が宜いよ、お燗を付け直すか

「サア一口お飲み」

酒に燗を付け直し、自身は外へ出て行つて、一寸した肴を買つて来て

「サアそんなに心配をしないで少しお飲みよ」

「さうか、それぢやア折角だから飲まう」力無い手に盃を取上げて飲んだが、平常一升二升と飲む酒も、今日は源五郎の口には苦く感じる。一口飲んでは盃を下へ置いて、何か考へに耽つてゐる。

「源之助、源之助」源五郎は次の間の方を見ながら呼んだ。

「何だえお父さん」答えながら源之助は顔を出した。

「一寸此處へ来い」

源之助は父の前へ来て坐つた。

「源之助、貴様に言つて置くがな、人間は老少不定といつて、何日何時どんな事があるめへものでもねへ、マア年を老つた者が先へ行くと大概相場が極つてゐる、お父さんが

萬一の事があつて居なくなつたら、お前が阿母さんに孝行しなければならねへ、宜いか、決して親に苦勞を掛けるんぢやアねへぞ、忘れねへやうに覚えてゐろよ」毎日に似ず熟々と言ふのであつた。源之助は怪訝顔

「お父さん、訂しなことを言つてるぢやないか、毎も酒を飲むと大きな聲で威張る癖に、いやに涙ぐんでそんな事をいつて……乃公アお父さんだつて阿母さんだつて疎末にはしないよ、大きくなれば立派な人間になつて、二人とも樂をさせる積りなんだよ」

「さうか、お前の其の了簡を聞いてお父さんも安心をした、三つ子の魂百までといふ、今言つた言葉を忘れねへやうに、大きくなつて何の職人になつても、お父さんのやうにお酒を飲んで、酒に心を奪はれねへやうに、よく親父が手本だから、忘れねへやうにし

ろよ」
「そりやモウお父さん大丈夫だよ、乃公はモウ戀々した、お父さんは酒さへ飲まなければ、人に文句なんぞをいはれるのぢやない、觀世太夫の奴にあんなことをいはれて口惜

くつて仕様がな、大きくなつたら乃公は、屹度お父さんの耻を雪がうと思つて居るんだ、大丈夫だよお父さん、乃公は確かりしてゐる。……それよりはそんな氣の弱いことをいはないで、矢ッ張り何ものやうに大きな聲で威張る方が宜いよ」といふ傍から女房も

「本當だよお前さん、どうかしたんぢやアないか、毎もと違つて厭に憎然として居るが、了簡造ひをしちやいけないよ」

「ナニそんな事があるものか」といつたが、浮かぬ顔をしてホツと太い溜息を吐いた。

黙めく食事濟ませて其の夜は毎もより早く枕に就いた。

(四) 父の自殺
救ひの神

夜は明けた。いつも早起きのおかつも其の日は寢過して近所で起きた物音に目を覺し

た。途端に

「ヤア阿母さん大變だツ、早く来て」といふ細工場の方で源之助の金切聲。何事が出来たかとおかつは驚いて細工場へ来て見ると、源五郎は稲葉用の鑿で咽喉を突いて俯伏せになつて血の中に倒れてゐる。

「ヤアお前さん、マアどうしたんだよ、お前さん、確かりしてお呉れ」と死骸に取違つて早や涙に暮れてゐる。

「阿母さん、私が小便に行かうとすると、阿父さんが居ねへ、どうしたのかと思つて来て見ると、此處にお父さんが死んで居た、モウ氷のやうになつてしまつたから、幾ら騒いだつて生ツ返る氣支ひはねへ」

「さうかねへ、何だつて此んな事をしたんだらう……お前さん、何だつてモウ……」

「阿母さん、モウ泣いたつて追ッ付かねへ……此んな事がありアしねへかと思つたのだ、觀世太夫があの般の面を二つに割つた、お父さんは然うはいはねへが、残念だと

いふ所から、到頭此んなことになつちまつた、手を以て殺さねへでも、お父さんを殺したのには願世太夫だ、……お父さんツ」源之助は父の耳に口を寄せ、

「今に私が大きくなつたら、屹度此の怨みは晴して上げる、お父さんの無念は此の源之助が晴して上げるから、迷はねへで行く所へ行つてお呉れ……阿母さん、モウ泣いたつて死んでしまつた者が生返る氣支ひねへ、是からは私がどんな事をしたつて、阿母さんを困らせるやうなことはしねへから、モウ泣かねへでお呉れ、よう……」

「アイよ……」

「阿母さんが泣くと、お父さんが行く所へ往かれねへ、よう、泣かねへで確かりしてお呉れ」と慰めながらも源之助も、咽るやうに悲しさは胸にこみ上げて来る。おかつは唯泣き伏してゐるばかりであつた。

「よう阿母さん、さう泣いてばかり居ちやア仕様がねへ、早く家主さんへ知らせなきやアならない」

漸々に涙を収めて、是から家主にも話をし、隣近所へも知らせたから、驚いて集つて来た相長屋の人々、親子を慰め、相談をして、親切に協力をして源五郎の死骸は菩提寺へ埋葬をした。

其の當座は母子は淋しい悲しい日を送つた。さて父が死んでしまつて見ると、今まで世帯は張り切れないから、家を畳んで、根岸に少しばかり知己があるから、此處へ引移つた。九尺二間の狭い家ではあるが其代り家賃も安い。母のおかつは知つてゐる人や近所の人の濯ぎ洗濯をして償かの賃銭を取つて母子の糊口を凌いで行かうといふ積り、源之助は恰かな子であるが、何しろまだ十三才の子供、何所へやるといふ話にも往かず、又不駄が加はつておかつも手放す氣もなかつた。

ト、源之助は外へ遊びに出て行くと、何所から持つて来るのか、木の端片を拾つて来て、親父が遺して置いた道具があるから、それを出して頻りにコツ／＼何か彫つて遊んでゐる。おかつが時々様子を見ると、親父の彫つたものを引出して見たり、又は雛形な

どがあるので、それを見たりして彫つてゐる。いろ／＼の面。又は恵比壽大黒などの彫刻をするが、それが中々十二や十三の子供が彫つたやうではない。おかつは大きに喜んで、此様子なら成人の後に、親父の跡を襲いで、一人前の面打になれるであらうと思つて其の將來を楽しみにしてゐる。源之助は毎日コツ／＼餘念もなくやつてゐる。けれども恵比壽大黒、佛像もあり、鰻鳥などもあるが、子供のことであるから手本がなくては彫れない。手本さへあれば、其の通り器用に彫る。

スルと或る日のこと、門に立つて源之助の彫るのを見て居た年の頃四十ばかりの小作りの商人體の男があつた。

「兄さんや」鑿て聲を掛けた。

「ハイ……」

「是は何かえ、昔んなお前さんが彫つたのかえ」

「ハイ、左様です」

「ウーム感心なものだ、……モシ／＼お内儀さん」おかつの方を見て聲を掛けた。

「ハイ……」

「お前さんの息子さんかえ」

「左様でございます、」

「歳才になりなさる」

「十三でございます」

「十三……どうも器用なものだ、失禮だがお父さんは……」

「良人は残りました、此の子と二人で暮して居ります」

「さうかえ、それはお困りだらう、何かえお前さんが、人の洗濯や裁縫をなすつて……磨練、どうも中々此の子は器用で、第一温順い、親孝行のえらい息子さんだ、マア／＼良い子を持つて、お前さんも先が楽しみでお任せだ、實は私は此の間から二三度此方の前を通るが中々感心だ、何日でも此の子が坐つてコツ／＼飽きずにやつてゐる、今日

よく／＼見たが、中々どうして子供の彫つたとは思はれない。どうも器用だ」我子のこ
とを賞められ、ば母の身としておかつも嬉しい。

「有難う存じます」

「誠に失禮したが、此の蜜柑箱に此の子の彫つたものが一ぱい入つてゐるやうだが、之
をソツクリ私が買ひたいと思ふがどうだらう」

「ア、それでは、此の子の彫つたものを買つて下さいますか」

「ア、買ひますよ、買ひますとも、今此の箱にあるだけではない、是から先此の子の彫
つたものは、どんなものでも私が買つて上げますから、失禮だが、何でも之を彫つて見
たいと思つたものがあつたら彫りなさるが宜い、引受けて私が買ふから……」

世に捨てられた身も、救ふ神があるかと思ふと、おかつは此の人の親切が沁み／＼と
嬉しかつた。けれども此んな子供の彫つた物を、買つて行つて直き返されやしないか、
と思ふ不安もあつた。

「誠に御親切に有難う存じます、けれども子供の彫りました不來の物、お買ひになり
ましてもお役には立ちますま」

「イヤ／＼そんな心配はしなさんな、私は此の先の坂本の玩具屋だが、此の子の彫つた
物が中々よく出来てゐるから、之を店へ列べて置けば屹度賣れる、賣れれば益も儲かる
のだから、幾らでも買ひますよ、おかみさんの方でも幾らか手助かりになるから、ドン
ドン彫んなさるが宜い、續しや賣れないにしても、又何とも仕様が有るから」

「さうでございますか、それは有難う存じます……源之助や、此のお方の御親切、よく
御禮を申し上げます……」

「小父さん有難う、さうして下されば私も助かります、一生懸命に彫りますから、幾ら
でも宜うございます、買つて下さいますし」

「ア、宜いともね、どうして此の面などは中々感心なものだ、大人が捨てたつて斯うは
往かねえ……私の家へもちと遊びにお出で、三軒屋芳兵衛といつて坂本三丁目居る玩

具屋だ、直き分るから」

「ハイ有難う存じます、何分お頼み申します」

三好屋芳兵衛は蜜柑箱に一ぱいあつたのを買つて行つた。實に母子の爲めに此の三好屋は救ひの神であつた。斯うなると源之助も張舎が付いて、一生懸命いろ／＼の物を彫つては三好屋へ持つて行く。處が三好屋のいつた通り能く出来てゐるからドン／＼賣れる。

源之助の熱心、三好屋の親切と相俟つて、源之助の彫つた物は評判が好い。十三の時から始めて十四、十五、十六になつた時にはモウ何でも彫れるやうになつた。三好屋も喜んで

「イヤ源之助さん、お前さんは感心だ、評判が好くつて私も世話甲斐がある、付けた下の名人になる……それに就て此んな所に居ては仕方がない、私の二三軒先きの家が一軒空いたから丁度宜い、彼所へ越して表へおツ張つてやんなさるが宜い、少し位な金は

私を用立つて進ぜるから職人でも置いて精出してやんなさい」

何所までも親切な三好屋の世話で、根岸から坂本通りへ轉宅をすることになつた。斯うなると三好屋の品物ばかりではない、芳兵衛が諸方へ紹介をして注文を取つて来てやるから、此の頃では源之助も生計が楽になつて、母を養ふことが出来るやうになつたら、母子は三好屋を神のやうに思つて居る。

(五) 大衆寺の圖魔

源之助が十七の時であつた。一日門邊に佇んだ一人の老僧。源之助の彫刻して居るのをデツと眺めて居たが

「御免下さい」と聲を掛けた。

「ハイ、入らつしやいませ」

「失禮だが、お前さんは中々細工は巧いものだ、感心をしました」

「そんなに賞められては面目ございませんね」

「お前さんは失禮だが、誰方のお弟子ですか」

「私は師匠といつてはございませんね、親が矢ッ張り斯ういふ稱業、早く親父に死別れまして、我流で覺えたのでございます」

「我流……我流でそれだけに彫りなされるのは大したものだ、お前さんは天下の名人だ」

「名人など、飛んでもないことで、そんなことを仰しやつては當惑いたします」

「イヤさうでない、私は四谷の大宗寺の住持ぢや、今度閻魔様を一つ拵へるのぢやが、どうも頭を彫つて貰ふ人がない、此の廣い江戸に私の氣に入つた人がないが、どうだね、お前さんなら確かなものだ、閻魔の頭を彫つちやア呉れまいか」

「へエ——閻魔様の頭——」一つ御意に叶ふか叶はないかやつて見ませう、御意に入らなかつたらそれまでのこと、何も修業の爲めですから……」全く源之助は修業の爲めに彫つて見やうと思つたのであつた。

「オ、彫つて呉んなさるかの、イヤそれで大きに私も安心しました……處で寸法ぢやが、此の通りにして下さい」といつて懐ろから寸法の書いてある紙を出して源之助に渡した。

「ハ、ア大きなものですな……宜しうございます、お引受けいたしました」

「では頼みましたぞ」懇ろに頼んで大宗寺の住持といふ人は歸つた。源之助から母に話をしたらおかつも喜こんで

「さうしてお頼み下さるのには、よく／＼のことゆる、お前も其積りで立派なものを彫つて下さい」

「ア、私も其の積りでやります」

精進潔齋、齋戒沐浴、スツカリ身を淨めて閻魔の彫刻にかゝつた。

幾日かの日を経て出来上つた。それを直ぐに大宗寺へ持つて行けば平凡だが、名人といはれる人は何所か人と違つた所がある。同じやうな閻魔の頭を二つ彫つて、夜人の寝

鎖まつた時分に、表へ其の中の一つを出して置いた。スルと夜中に往來の者が、源之助の家の前まで来ると「キヤツ」といつて、氣の弱い人などは目を廻はしてしまふ。中には腰を抜かしてワア／＼いつてゐる者などもあつた。其の翌晩は何事もないが、又其の翌晩になると目を廻す者や、腰を抜かす者がある。之が噂さになつて家主の奥兵衛さん朝早く源之助の所へやつて来た。

「お早う」

「家主さんお早やうございます、何か御用で……」

「何か御用ではない源さん串戯をしては困る、飛んでもないことをするぢやアないか」

「何でございます」

「何でございますつてお前、此の頃丁度此の家の前あたりで、よく人が目を廻したり、腰を抜かしたりする人があるといふ話だ、そんなことはなからうと思つて、實は一昨日の晩、此の前を通つたが何事もない、昨夜も私が何事もあるまいと思つて通ると、

イヤ驚いたの何のといつて、恐ろしい怖い顔をしたものが居たが、源さんお前何か推へて表へ出して置いたんぢやないか」

「家主さん御覽なすつたか」

「御覽なすつたどころぢやない、私は驚いた」

「アハ、、、、、どうでございます、随分凄うございますかね」

「凄いの何のつて、何をまあ推へて出して置いたのだ」

「實は是れですがね、御覽なすつてお呉んなさい」といつて闇魔の頭を其所へ持出した。奥兵衛が見て

「是れかい……」首を曲げて考へた。

「是れならそんなに驚きやアしねんだが、此んなものぢやなかつたぜ」

「さうですか、それぢやア此の方ですか」と云つて又一つの頭を持出した。家主は一目見るより震え上がった。

「是れだく、どうも恐ろしい怖い顔をしてゐる閻魔様だ、今此處で見てさへ餘まり好い心持ちやねへ、是れが眞暗がりの所にヌーツとあつたらう、どうも驚いたの何のつて、串刺ちやねへ、今夜から此んな物を出して置いて置いちゃア困るよ、引込まして置いてお呉れ」

「へエ承知いたしました、貴方方がさう仰しやつて下されば何より、私も安心をいたしました」

「何でこんなものを彫んなすつたんだ」

「實は四谷の大宗寺の和尚さんから閻魔様の頭を彫つて呉れと頼まれました。引受け、御覽の通り二つ彫りましたが、何方が良いか自分の眼では分りませぬ、人様の眼に良いと認めが付かなければ分らない、皆さんが恐ろしい、怖いと思つたら其の方が良いのですから、此の怖い方を大宗寺へ納めることにいたします。此方の方は、なまじい残して置いて仕方がございませぬから」といつて細工場から鉈を持って来て、其の場で割つ

てしまった。家主は手を打つて感心した。

「イヤ源さん、お前さんはえらい、名人だ、恐れ入つた。其の位にしなれば良い物は出来ない」

斯うして彫上げた閻魔の頭は、大宗寺へ納めた。今も四谷の大宗寺の閻魔は名物の一つで、口から子供の衣服の附紐が下つてゐる。是れは嘘を吐いた子供を呑んだのだと言ひ觸らされて、無智な昔の江戸ツ子は之を本當にしてゐたものであつた「アレを御覽、閻魔様の口から附紐が下つてゐるだらう、あれは嘘を吐いたり、悪い事をした子供が呑まれてしまったので、其附紐が下つてゐるのだよ、お前も悪い事をする、閻魔様に呑まれてしまう」とは母親や、父親が、小さい子供を脅す言葉であつた。子供は怖がつて溜順くすることは、人も知る所である。其の有名の大宗寺の閻魔は此の源之助の手に成つたものであつた。

(六) 怨は深し般若の面

此の閻魔の評判が高くなつた。ト此の事が觀世太夫の耳に入つた。
 「私も追々老る年だ、生涯の舞納め、將軍家の御前でする般若の面を、源之助といふ者に頼んで見やう。それほど腕の者なら、般若の面も見事打つであらう」と傍らの者に語つた。觀世太夫は源之助が、自分が酒の上でしたことを、言つたことの爲めに、自害をして死んだ源五郎の伴であるといふことは知らなかつた。人を源之助の所へ遣はして「將軍家の御前で舞ふ般若の面を念を入れて打つて呉れるやうに」と頼んだ。此の依頼を受けた時に源之助の胸は躍るやうであつた。親父は般若の面を二つに割られた爲めに割られたのだ、五年後の今日、其の同じ般若の面を、其の伴と知つてか知らでか頼みに來るといふのは、死んだお父さんの引合せか、己れ觀世太夫、今に見る、此の源之助の怨みの一念、腕にかけて……と思ふ心も色に出さず、

「有難う存じます、日本一の觀世太夫、お氣に入るかどうか存じませぬが、お頼みになつたのは私の名譽、此上もない面目でございますから、精々念を入れて拵へて差出しませ」と叮嚀に言つて使の者を返した。

「サア阿母さん、佛様へお燈火を上げてお呉れ」

「何だねへ源之助や、お客様が歸ると早々お燈火を上げろなんて、佛様のお燈火は朝と晩だけで宜いぢやアないか」

「さうでないだ……阿母さん、今のお客様を誰だと思ふ」

「誰方だえ、御注文かえ」

「御注文も御注文、今の容は觀世太夫の使だ」

「エ、ツ觀世太夫……」おかつは眼を睜つた。觀世太夫と聞いて身の毛が慄つた。

「阿母さん喜んでお呉れ、お父さんの怨みを晴す時が來たのだ、私が源五郎の伴だといふことを知つてゐるのか知らないのか分らないが、それも同じ般若の面を觀世太夫が頼

みに來るといふも、死んだお父さんの引合せだ、今度こそ立派な面を拵へて、觀世太夫を驚かしてやらなければならぬ……サア阿母さん、佛様へお燈火を上げてお呉れ」

「さうかえ、それはマア宜かつたね」

母親も喜んで、直ぐに佛前へ燈火を上げる。源之助はビタリと佛前に坐つて

「お父さん、今度觀世太夫から般若の面を頼みに來ました、私は一生懸命立派なものを拵へて、お父さんの耻辱を見事雪いで進めるから、良い上にも良く出来るやうに、草葉の蔭から守つてお呉んなさい」と生きてゐる人に物を言ふやうに言つて、暫らく念じて居たが、それから水で身體をスツカリ淨めて父の源五郎が最期の時に用ゐた細工の鑿を研ぎすまして、いよく彫刻にかゝつた。

體て彫り上げた般若の面。源之助自身にも非常に良く出來たと思つた。けれども人が見てどうかと思つたから、其の面を試すことになつた。實に源之助は熱心な男であつた。此の前閻魔の頭を彫つた時には、自分の家の前へ置いたが、今度は變つた所にして

見やうと考へたので、自分の家の近所に辻堂がある。其の辻堂の縁の所へ夜になつて般若の面を置いて、自分は辻堂の蔭に隠れて様子を窺つてゐた。

ト向うから五六人の職人らしい男が何か話しながら此方へやつて來る。

「エ、半次、此の間吉公の所へ泥棒が入つて、吉の奴腰を抜かしたつてえちやねへか」

「さうだよ、怖いなア泥棒は……」

「ナニ、泥棒が怖い……ウフツ、泥棒が怖いといふ面か、泥棒の方で手前の面を見たら逃してしまはア」

「冗談云ふな、それも普通の泥棒ぢやアねへんだ長え刀を持つて、ダイと突出して命を出せ、出さなければア命がねへぞといふんだから、吉公だつて誰だつて腰を抜かさアな」

「何を言やアがるんだ筒棒めえ、幾ら長え刀を持つて居たつて腰を抜かす奴があるものか、長え刀なんざア怖かアねへちやねへか」

「オヤ大きなことを言やアがつて、熊、お前長え刀を突出されて怖かアねへか」

「笹棒めえ、怖いことがあるものか、乃公なんかア斯う見えても一刀流の免許取りだ、刀を抜いて来やうと槍で突いて来やうと、ボン／＼と左右に投げ飛ばしてしまうんだ」

「ホ、一層威勢の好いことを言つてやアがるな、けれども熊、手前がそんなに強けりやア、幾ら淋しい途だつて安心だ、お前へ先へ立つて行つて呉れ」

「宜いとも、後へ付いて来な」

熊公が先立ちでやつて来た辻堂の前。縁の所に何ともいへない恐ろしい顔をしたものが自分の力を晒めてゐる。之を見ると熊公キヤツといふと引ッ縋返つてウームと氣絶を

してしまつた。

「ヤイ／＼どうしたんだ熊……オヤ／＼大變だ、熊が氣絶をしてみましたやアがつた、願ひかしたら、何しろ手を貸してくれ」大勢で介抱をすると漸々氣が付いた「どうした熊一刀流の免許取りがキヤツといつて氣絶をする奴があるものか、どうしたんだ」

「ア、驚いた、大變だ、あ、あ、あれを見ろ」と指差をした方を他の者が見ると「キヤツ」といつて腰を抜かささんばかりにして逃げ出してしまつた。

小陰に居た源之助は喜こんだ。

「是ならば大丈夫」と其の夜は歸つて翌朝。其の般若の面を觀世太夫の所へ納めた。觀世太夫が見ると、實に物凄いやうに良く出来てゐるからスツカリ氣に入つた。ソコで自分の家で下稽古をすることになつた。源之助の打つた此の般若の面を、鱗形の若付に朱の袴。一通り稽古をして見ると、どうも面の工合の好いこと、是れならば將軍家の御前で見事に勤まると思つた。稽古が終つて其面を取らうとすると、ピツタリと付いて取れない。そんな譯はないと、いろ／＼にやつて見たが、どろいふ譯か面が取れない。家内一同の者も心配をして、どうしたことであらうか、何にしろ源之助の所へ人をやつて持へた當人だから、本人に聞いたら分るだらうといふので、直ぐに源之助方へ人が来た、取敢ず觀世の所へ来た源之助、此の話を聞くとポロリと涙を流した。

「面が取れませぬか、取れないのが當然です」

「どうしてぢや」

「何を隠しませう、今から五年以前、觀世様、貴下の爲めに、而も同じ般若の面を、二つに割られた源五郎の私は悴でございます」

「エ、ツ……」

「あの時盆の入用の金に困つて、豫てお頼みの般若の面、拵へ上げて、私が使になつて持つて上つた所、貴下は酒に酔つてお在になつたが、此んな面は役に立たぬと仰しやつて二つに割つてしまつた。其の爲めに親父の源五郎は、醫で自害をしてみました、親父は口には出しませぬが、定めし貴下を怨んだでございます、私は別に貴下を怨む譯もないが、人の一心といふものは恐ろしいもの、親父が丹誠をして拵へた面、酒に根を奪はれて、此んな拙ない物は役に立たぬと貴下が仰しやつた、それを残念に思つて親父は自害をいたしました、其の志を繼いだ私、今度こそ親父の耻辱を雪がうと、一

心に打つた此の面、幸ひに御手許に納つて、貴下がそれをお着けになつて、面がピツタリ顔に付いて取れないといふのは實に不思議な話し、是も私の一心が通つたのでございませう、私が取つたら取れぬことはございますまい、只今取つて差上げませう」といひつゝ源之助が手を掛けると、不思議に面はパツと取れた。が、其時にタラ／＼と觀世の顔から血が流れた。一同が驚いて見ると觀世の頬先が血に染んでゐる。一説には觀世太夫の肉が面に付いて取れたとしてあるが肉が付くこともあるまい。其の頬の血が面の裏にベツトリ付いて居る。

ホツと息を吐いた觀世太夫。源之助の顔をデツと睨めた。

「誠に氣の毒なことをした。それでは源五郎は自害をしたか、私が此の前酔つてゐたばかりに意外の過言、其爲め源五郎が飛んだことになつた、併し其の悴のお前、實に親に勝つた天下の名人誠に感服をしました、先年の私の過言は今改めてお前に詫入る、どうか勘辨して下さい、佛へもお前から宜しく詫びて下さい、此の面は觀世の家の實にす

る」といつて初めて観世太夫も目が覺めたやうに、昔の罪を詫びた。詫びられて見れば源之助も、別に深い怨みがある譯でもない。スツバリと心持を直して歸つた。

観世太夫は自ら此の事の次第を認めて此の般若の面は家の寶として保存することになつた。

源之助は源五郎と父の名を繼いで、改めて観世の家へも出入をするやうになり、名人と謳はれて、其の名は全國に知らるゝやうになつた。

(をばり)

女 達 磨

(一) 小山の宿の邊場茶屋

享保の頃に兩國村松町に相模屋幸兵衛といふ煙草問屋があつた大勢の奉公人を使つて裕福に暮して居る。手代の直七といふのは小僧から育つて今年二十四になるが、至つて律義で商賣にも中々慣れて主人も直七には何事も、指圖をしないで任せる位であつたら、何れは娘のおふちの婚にして相模屋の跡を繼がせやうといふ積りで居た。娘のおふちといふのは今年十七で近所でも評判をされるほど美しい女であるが、裕福の家に育つただけに誠に温順く、両親の話して直七が自分の亭主になるといふことを聞いて、男振は好し温順しい男だから、おふちも夫婦になるのを樂しみにして居た。五月の末のこと直七は下野宇都宮の生れ、故郷に伯父が居るから、それに逢ひたいと云つて暇を買つて

宇都宮へ行くことになつた。其時に主人の幸兵衛が直七を奥へ呼んで

「直七、口外もお前に話をしたがお前も永い間奉公をして、能く今日まで辛抱をして呉れた、其の内に不束だがお前におふぢの婿になつて貰つて、此の相模屋の跡目を継いで貰いたいと私は思つて居るのだ」

「ハイ有難う存じます」

「就いては今度故郷へ行くのを幸ひ、能く伯父さんとも相談して略腹を決めて来て貰ひたい」

「ハイ有難う存じます、私のやうな者でもそれ程に思召し下さる御恩は決して忘れはいたしませぬ」

「それから彼方の方には煙草の出来る所も澤山あるから、良い葉があつたら買つて来て貰ひたい、五十兩お前に預けて置くから、宜いやうに計つてお呉れ」と言つて五十兩渡した。

「畏まりました」

其の五十兩の金を受取つて、旅の仕度も手軽に直七は相模屋の家を出た。

故郷の宇都宮へ行つて久し振で伯父にも會つた。二三日泊つて江戸へ歸ることになつたが、歸り途に主人から頼まれた煙草を賣出して行かうと考へた。それには水戸の方が良い煙草が出るから水戸の方へ行かうと思つて小山といふ所まで来た。時に丁度正午であつた。有合肴、酒めしと大きく書いた腰障子が立て掛けてあるのは建場茶屋に違ひない。丁度腹が空つて居るから直七は其所へ入つた。

「御免なさい」

「入つしやいませ、此方へお掛けなさいませ」

「お酒は飲まないから、何か有合せの肴で御飯をお呉んなさい」

「ハイ 畏りました」

直七は床几に腰を掛けて汗を拭いて扇で風を入れながら、肴拵へをして居る女を見る

と、年の頃は二十二三でもあらうか、衣服こそ田舎織の白地の浴衣を着て、帯でも黻だらけの怪しげなのを締めて居るし、髪とても亂れて居るが、其の顔容と云ひ色の白さ。粧つて居ないが、これが天然の美といふものであらうか、何とも云へない美しい女。見て居る内に直七は段々扇の手が止つて来て、果は扇を開いた儘燦々もしないで其の女に見惚れて居る。其の内に睡の仕度が出来て女は直七の前へ進んで来て

「江戸のお方で入つしやるやうですが、此邊は田舎のことで、御口には合ひますまいけれども、どうぞ御勘辨を願ひます」

と丁寧挨拶をして直七の顔を見てニッコリと笑つた。其の愛嬌のあること。直七ブルブルと震へた。箸を取るのも忘れて女の方ばかり見て居たが、女も自分の方ばかり直七が見て居るから、妙な人だと思ひながらも見返した。顔を見返された直七はハツと氣が付いて氣極が悪さうに俯向きながら箸を取つて、初めて飯を食へ始めた。處へ

「オイおはま、おはま」呼びながら入つて来た男がある。年頃は三十ばかり色の淺黒い苦

み走つた一寸した男だが、汚れた單衣に三尺帯を尻に締めて居る様子は誰が目にも破落戸といふことは顔かれる。女は男の顔を見ると又かといふやうに眉に八の字を寄せた。

「お前さん何だい」

「モウスツカリ取られてしまつて、二進も三進も往かねえんで、どうかして呉れ」

「どうかして呉れつたつて、お金なんざアありやアしないよ」

「賣溜があるだらう」

「賣溜つだつて此んな暑いのに日中は人が通らないから、賣溜なんざアありやアしないよ、第一お前さんみたやうに、年中稼業もしないで、遊んでばかり居て、間さえありや金ツツテ私を苦しめちやア困るぢやアないか」

「何を云やがるんだ、乃公の體で乃公が遊ぶんだ、餘計なことを云やアがるな、賣溜がなけりやア何か質草があるだらう、出せ」

「何にも質草なんざアありやアしないよ」

「ないことあるものか……」

男はジロジロ見廻して居たが、片隅にあつた女物の單衣に目を着けて

「是が宜い・おはま、之を貸して呉れ」

「いけないよ權太さん、それは私の着物だよ」

「だから宜いぢやアねいか、他人の物ならいけねいが、女房の物を亭主が持つて行く分にやア構はねえ、貸せ貸せ」

「幾ら亭主だつてそりやアお前餘り酷いよ、私は斯うして汗になつて倒れて居るから着て居る着物なんざア、絞れるやうになるから、歸る時にそれを着て行くんだね、それを持つて行かれてしまつたら、私は困つて仕舞ふよ」

「何云つて居やアがるんだ、亭主だつて此の着物只一枚、着たツ切り雀だ、女房の癖に着替なんざ蠶澤だ、出しやアがれ」

おはまが拒むのを引つたくるやうにして持つて行かうとするおはまは其の手に縋つて

「アレ權太さん、後生だから是ばかりは勘忍してお呉れ、夕方までにやアお錢をどうかして置くから……」

「晩まで待てねえんだ、エ、出しやアがれ」

と又取らうと二人は争つて居る。飯を食べて居た直七は堪り兼ねて箸と茶碗を持つた儘立上がつた。

「モシ／＼、モシお二人さん、少し待つて下さいまし、マア／＼お前さん其んな亂暴なことをしないで……」

權太はデロリと見て、

「何だ手前は……」

「お前さん何だね、此のお方はお客様ぢやないか、お客様に手前なんて……」

「さうか……どうか打棄つて置いてお呉んなせえ、私の勝手なんですから……」

「ヘエ、貴下の勝手かは存じませぬが、今伺ひますれば、何かお金が要る爲めに其の衣

服を持つて行かう、お内儀さんは其れを持つて行かれるや困ると仰しやつて居る様子、
どうもお前さんが悪いやうに思ひます」

「何云やあがるんだ、服に女房の肩を持つちやアねえか」

「肩を持つちやアございませぬが、全體幾らお金が要るのでございませぬか、私は其の
お金を差上げると云つては失禮でございませぬが、お立替をしやうではございませぬか」
權太は急に世辭笑ひ、

「へッへ……どうも相済みませぬ、ナニお前さん、私等のことで高が知れて居ります、
幾らかくらは申しませぬ……へエけれども旦那にお金を頂く譯がねえから、衣服を持
つて……」

「マア〜お待ちなさい、私も折角お止め申したからは、どうかお内儀さんがお氣の毒
だから、其の衣服は勘辨して上げて下さいませ、其の代りお金は私が差上げますから……」

「へエ、どうも相済みませぬ」

直七は財布の中から取出した一兩の金

「少ないが此處に一兩あります、失禮ながら之を差上げますから、モウお内儀さんを
めないで下さいませ」

「へエ、どうも有難う存じます、相済みませぬ」

「済まないと思つたら、是れからは遊んで居ないで、稼業に精を出す様になさいませ、
稼業さへなさればお金に困るやうなことはございませぬ」

「へエ、どうも相済みませぬ……ヤイ〜おはま、旦那にお禮を申せ、取山戲やアがつ
て、乃公は是れから行つて来るから、旦那に良いお茶を上げろ……へエ旦那、ちやア御
免なさいませ」

言ひ捨てた權太といふ男は出て行つてしまつた。

(二) 囚はれた戀の絆

後見送つておはまはホツと息を吐いて

「旦那様有難う存じました、飛んだ御迷惑をかけて何とも相済みません」

「イヤどうも亂暴なお方だ、アレはお前さんの御亭主かへ」

「ハイ、お恥かしう存じます……旦那様御飯を上がつて在つしやる所へとんだところ御迷惑を……お肴を替へて……」

「イヤ、モウ御飯は澤山でございます……お内儀さん、御亭主は毎日ア、して遊んで居なさるのかい」

「ハイ……」

「今の様子ぢやア定めしお前さんが苦勞をなさることでございますが、全體何の御稼業をなさるので……」

やさしく尋ねられておはまはホロリと涙を流し

「初めて御出でになつた御客様に、飛んだ御迷惑をお掛け申したばかりか、御親切な今のお尋ね、耻をお話し申すやうですが聞いて下さいませ、あの男は元八木屋權太郎と云つて古着屋でございます、半年前に私が嫁に参つた時分は堅氣でございましたが、其の時分に悪い友達に誘はれて博突場入りをしたのが始まり、色々意見をいたしましたか聞きません、商賣の資本から品物まで共な博突の爲めに取られて仕舞ひ、今では本當の博突打になつて、仕方がなしに今では親分の幸手屋次郎兵衛といふ人の家に厄介になつて、私は斯うして建場をやつて居りますが、間さへあれば、ア、してお金を強請つて持つて行つて仕舞ふので、毎日泣かぬ日とはございません」

「へエーそれはどうもお氣の毒なこと、そんな事だつたら親分といふ方に意見をして頂いたら……」

「イエ親分も度々意見をして下さるのですが少しも聞きません……此んなことを初めて

お目にかゝつた日那樣に御話し申すのは可笑しうございますが、お聞きなすつて下さいまし」

おはまは胸にあることを人に聴いて貰つて、自分の今の身をどうかしたいと思つて居た矢先へ直七の親切。此の人なら話をして泣いて見たいと思つた。直七も此の女の話を聞きたいやうに考へた。

「彼んな悪い男と知つたなら嫁に參るのではなかつたのですが、間へ入つて橋渡しをした人が悪い人で、私が両親に別れて只一人、幾らかの物でも持つて居たのを目的にアノ權太郎と共謀になつて、權太郎は地面家作を持つて居る財産家だと云つて私を欺したのでございます、嫁に来て見ると皆な嘘で、私の持つて居たものは皆な賣られたり使はれたり、揚句の果が今申上げたやうな始末……」

おはまは其當時のことを思ひ出して新らしい涙に誘はれた。

「それも私が能く身許を確めず、慍に目が眩んで嫁つたのが誤りゆゑ、仕方がないと話

めますが、此の頃では私を女郎に賣ると云つて、諸方へ話をして居るといふことを聞きました、私は、私は女郎になる位なら死んで死舞ひます」

「エ、貴女を女郎に……飛んでもないことをする人だ、貴女も又死んで仕舞ふなどと、そんなことをするやうな人なら、離縁をしたら宜いぢやございませんか」

「サア離縁をしたことは山々でございますが、離縁をするには五十兩といふ金を出さなければ承知をいたしませぬ今の所五十兩は扱置いて五兩の金もございません、と云つて逃げ出しても女の足、若し見付かつたら彼んな悪い男、どんなことをするか分りませんので、どうして宜いかと、毎日其のことばかり考へて身も瘦せるやうでございます」

「へエー、五十兩やれば離縁が出来るのでございますか」

「ハイ……」

直七は話をして居る間も眼は女の顔から離れなかつた。ア、此んな美しい女なら大切に

してやれば宜いのに、散々苦勞をさせるといふ權太郎といふ奴は憎らしい奴だ。けれど

も此の女も彼の男と一緒に居るのが厭らしい。離縁をしたいといつて居るを幸ひ離縁を勧めて、自分の女房になつて貰はうか……それには五十兩の金が必要。五十兩といふ金は自分には持つて居ないが、此處に旦那様から預かつた煙草の仕入の五十兩。之をやつて此の女を……イヤ／＼それでは旦那様に濟まない、幾ら此方ばかり思つても女が承知して呉れるかどうか分らない、此の儘に行かう……とは云へ此の女にアノ苦勞をさせるのが……五十兩やつて離縁をさせて私の女房になつて貰はう……直七は色々と思ひ惑つて居たが、纏て思ひ定めたらしく向き直つて

「お内儀さん五十兩の金は私が出しますから、離縁をなさいまし」

「エ、ツ……」女は眼を睨つて直七の顔を見た。

「離縁をして、どうか私の、私の女房になつて下さいませんか」

おはまが何と云ふかと思つて直七はヂツと顔を瞞めた。おはまは五十兩出さうといふのさへ突飛であるのに、女房になつて呉れといふ言葉に、おはまは呆れて、自分の耳を

疑ふやうに直七の顔を見返した。

「サア斯う申したら、定めし氣が狂うて居るとでも思ひなさらうが、眞實のこと……お内儀さん此處は店先、暑くつていけない、其方の日陰で悠くり御相談をしたいと思ひます」

「ハイ、どうぞ此方へお出で下さいまし」

おはまは氣が付いたやうに奥の方を片付けた。

(三) 親方の計らひ
手切の金の五十兩

おはまの亭主の權太の爲めには親方の幸手屋次郎兵衛といふ博突打の親分があつた。モウ今年六十二三、稼業柄に似ず夫婦とも人の善いものであつた。茶店でどういふ相談をしたか、おはまは直七を連れて次郎兵衛の家へ來た。おはまは手短かに今日の出來事を話して、直七との相談も語つて自分の心持も話した。次郎兵衛はニコ／＼して

「是はく入つしやいまし、どうか此方へお出で下さいまし、私は幸毛屋次郎兵衛と申します、どうかお心安く……」

直七は丁寧に手を仕いて

「へエ、私は江戸兩國に居ります直七と申します者、どうか宜しく……」

「是は御挨拶で恐れ入ります、就きましては早速でございますが、只今おはまから委託は聞きました、平頭ならぬ貴下の御親切、有難うございます、私からお禮を申し上げます、おはまの心持では、權太の奴はア、いふ悪い奴で、先の見込のない奴、彼んな男に附いて居たら、どんな目に逢ふか知れず、それにお前さんはおはまのやうな女でも見込んで女房にして下さるといふ、さういふ優しい人の所へ行つたら、どんなに幸福だか知れないから、權太と縁を切つて、お前さんと夫婦にしてくれとおはまの頼み……おはまは誠に心立の好い者で、私も自分の娘同様に思つて居る女、權太の爲に欺されて誠に可哀な身の上、どうかお前さんが然ういふ思召しなら、女房にして可愛がつてやつて

下さいまし、それに就ておはまからもお聞きでせうが、假令悪い奴でも權太は亭主、

此の儘お前さんの女房になつたら、どんなことをするかも知れませんが、立派に縁を切つて上げたいと思ひます、それにはどうしても五十兩の金をやらなければ承知をいたしません、それをお前さんが出してやらうとの御親切、誠に金のことを云ふのはお氣の毒様だが、どうかさうしてやつて下されば私達も嬉しいし、おはまもどんなに幸福か知れません、其代り權太の方は私が引受けて、後で紛擾のねえやうに計らひますから」

「へエ、誠にお恥かしうございますが、一寸茶店へ立寄つたのが縁となり、おはまさんの姿を見て……へエ、どうかマアア、云ふ人を女房に持ちたいと思ひまして……どうか五十兩は出ますから、權太さんの方の縁を……」

「エ、承知いたしました、其の方は御心配のねえやうにいたします」

「私も江戸で煙草屋をして居ります、おはまさんと夫婦になつたら、夫婦共稼ぎ、一生懸命に働かうと思ひます」

「ハイ、飛んだ宜い人に見染められて、おはまお前本當に幸福だ……」

「ハイ……」
おはまも眞赤になつて備向いた。直七は懐中から出した五十兩……ア、旦那に濟まな
いが、何れ稼いでお返し申しますと、押頂いて次郎兵衛の前へ出した。

「では五十兩、お徳め下さいまし」

「へエ確かにお受取り申しました……では此處に長く居ると又權太の奴が来ては事が面
倒、直ぐにおはまを連れてお立ちになつた方が宜うございませう……おはま、何にもな
くとも直ぐに支度をして、旦那と一緒に……」

「ハイ……色々伯父さん、心配を掛けて濟みませんが……」

「ナニニ乃公こそお前には是れまで苦勞を掛けて氣の毒だつたが、お前が心立が良いから
此んな良い旦那が出来たのだ、結構だ、晴婆さん」

次郎兵衛の女房も嬉しさに涙さへ浮かべて

「おはまや、宜かつたね、私はお前に別れるのは辛いけれども、お前の身の爲だからど
んなに嬉しいか知れない、旦那と夫婦になつたら愛想を盡かされないやうにしてね……
旦那様、此女は兩親もなし頼りになる者は一人もございませぬ、誠に可哀なものので
ございますから、どうか可愛がつてやつて下さいまし」

おはまのことを頼むのも女の情、支度もそこく二人は後の事を次郎兵衛に頼ん
で、手に手を取つて、夜に紛れて小山の宿を立つてしまつた。其翌日權太は次郎兵衛の
家へやつて来た。

「親分おはまは居りますかい、今店へ行つたら今日は出て居ませんが……」
「權太か、此方へ入れ」

「へエ……おはまはどうしました」

「今話をする……權太、手前おはまを女郎に賣らうと云ふので、諸方へ頼んで居るさう
だが、さうか……飛んでもねえ奴だ、手前が賣る氣でも乃公が承知しねえ……だが、手

前も金(かね)が要(い)るからそんな事(こと)をするんだらう、どうだ、今(いま)此(こ)處(こ)で五十兩(ごじゅうりょう)をやるがお(お)はまを離(り)縁(えん)しろ。それともお(お)はまを抱(かか)へて居(ゐ)てえか、五十兩(ごじゅうりょう)欲(ほ)しいか、返(へん)事(じ)をしる」

「へエー、それやア親(おや)分(ぶん)、五十兩(ごじゅうりょう)になりやアお(お)はまを離(り)縁(えん)するが、本(ほん)當(たう)でござ(ござ)いますか」

「嘘(うそ)を吐(つ)くものか、五十兩(ごじゅうりょう)右(みぎ)から左(ひだり)へ渡(わた)してやるが、其(その)代(しろ)り權(けん)太(た)、モウお(お)はまは手(て)前(まえ)の女(に)房(ぼう)ぢやアねえから お(お)はまがど(ど)んな事(こと)をしやうと、愚(おろ)圖(と)々々云(い)やアしめえな」

「そりやア五十兩(ごじゅうりょう)になりア何(なに)にも云(い)やアしません」

「宜(よろ)し、五十兩(ごじゅうりょう)渡(わた)してやるから、後(のち)々々何(なに)事(こと)も苦(くる)情(じやう)を云(い)はねえといふ證(しやう)文(もん)を書(か)け」

「私(わが)には書(か)けませんから、親(おや)分(ぶん)一(いつ)つ願(ねが)ひます」

「さうか、婆(ば)さん硯(えん)箱(ばう)を持(も)つて來(こ)な」

次(ついで)郎(らう)兵(へい)衛(ゑ)はスラ／＼と證(しやう)文(もん)を書(か)いて、

「サア是(こ)れを見(み)る。宜(よろ)からう」

「へエ……五十兩(ごじゅうりょう)お(お)呉(く)んなせえ」

「今(いま)やるから、此(こ)の手(て)前(まえ)の名(な)前(まえ)の下(した)へ印(いん)形(ぎやう)を捺(な)せ、印(いん)がなけりやア拇(も)印(いん)でも宜(よろ)し」
權(けん)太(た)は拇(も)印(いん)をビタリと捺(な)した。

「宜(よろ)し／＼……サア五十兩(ごじゅうりょう)やる」

「有(あ)難(がた)う存(ぞん)じます、久(ひさ)し振(び)で纏(まと)つた金(かね)の面(めん)を見(み)ました、親(おや)分(ぶん)の前(まえ)だが、何(なん)日(ひ)見(み)ても金(かね)の顔(かほ)は悪(わる)かアねえね」

「其(その)代(しろ)り是(こ)れから後(のち)お(お)はまの難(がた)儀(ぎ)になるやうな事(こと)をすると、此(こ)の次(ついで)郎(らう)兵(へい)衛(ゑ)が承(しょう)知(ち)しねえぞ」

「宜(よろ)しうござ(ござ)います、お(お)はまは何(なん)處(こ)へ行(い)きました」

「何(なん)處(こ)へ行(い)かうと、離(り)縁(えん)をした女(に)房(ぼう)に用(もち)はねえ筈(はず)だ、サツサと出(で)て行(い)け」

(四) 良(よ)人(ひと)の大(たい)病(びやう) 思(し)案(あん)の末(すえ)

お(お)はまと直(な)七(しち)は小(こ)山(やま)を立(た)つて江(え)戸(と)へ來(き)たけれども直(な)七(しち)は五十兩(ごじゅうりょう)の金(かね)を使(つか)ひ込(こ)んで居(ゐ)る

から主人の相模屋へ歸れない、又おはまには心配を掛けまいと思ふから、相模屋のことも五十兩の金のことも云はなかつた。下谷の西町と云ふ所に小さな家を持つて、自分は煙草を買出しては、場末々々を小賣をして歩いて其日を漸く送つて居た。おはまは朝も早く起きて、直七に手傳つて煙草を袋へ入れたりして一緒に働いて居た。一年ばかり斯うして居る内に直七が、不圖風邪の心地で寝たのが初まりドツと重い枕に就くやうになつた。貧乏の中であるから、薬どころではない。其の日の生計にさへ困るやうになつた。けれども貞節なおはまは少しも嫌な顔をしなない。直七に心配をさせまいと色々工夫しては其の日を過して居た。

「おはま、御前には誠に濟まない、私が意氣地がないばかりに、江戸へ來ても此の苦勞、どうか勘辨をしてお呉れ」

直七はポロ／＼涙を流して居る。

「何ですなあお前さん、勘辨して呉れなどと、亭主の病を女房が看病をするのは當前ぢ

やアありませんか、」

「でもア、いふ譯でお前を連れて江戸へ來ても、樂をさせてやらうと思つたのも然うもならず、此んなに苦勞をさせるかと思ふと、私はお前に氣の毒でならない」

「何を云ふんですよ、そんな事を思ふと身體に障ります、私は苦勞だとも何とも思つて居りませんから、モウ／＼そんな心配はしないで下さいまし」

「さう云つて呉れ、ば有難いが、どうして此頃の生計をやつて行くかと思ふと、お前の苦勞を察する……アア是といふのも御主人の御、……おはま」

「ハイ……」

「今までは隠して居たが、實は私には御主人があるのだ、其御主人の名前は云へないが、私は煙草屋に奉公をして居て、小僧から手代にまでなつて、去年の夏故郷の宇都宮へ行つての戻り、お前の店へ寄つたのが縁となり、斯うしてお前を連れて來て夫婦になつたが、彼の時の五十兩のお金も實は御主人の金」

つたが、彼の時の五十兩のお金も實は御主人の金」

「エ、ッ」

「煙草の仕入に預かつた金を、お前を女房にしたいばつかりに使つてしまつた、其内に働いてお返し申しに行きたいと思つて居る内に此の思ひ、是も御主人様の罰、悪い事は出来ないものだ」

おはまは胸が一ぱいになつた。それでは彼の五十兩は御主人の金であつたか、さういふ思ひをしてまでも自分を女房にして呉れたかと思ふと直七の親切が沁み込くと嬉しく思はずハラ／＼と涙を流した。

「お前さん、濟みません、濟みません。私ゆゑに御主人様の所へも歸れぬ始末、私さへなかつたら、そんな苦勞は掛けますまいに、勘忍して下さいまし」

「何のお前が謝ることはない、是も前世からの縁、其内に御説も叶ふ時があるだらう」

「身體が癒つたら一生懸命働いて、それだけのお金を持つて夫婦してお詫に行つたら旦那も許して下さいませう、くよく／＼思はず身體を癒すが第一でございます」

と力を附けたものゝおはまには其の金よりも何よりも一番心配なのは其の口／＼の生計の金、今は賣る物もなし、良人の看病もしながらでは内職をしても藥は愚か、米の代さへも取れない。どうしたら宜からう……と色々と思案に餘つて、同じ長屋に居る女が、柳原へ夜應に出る。其の女に頼んで、おはまは直七には觀音様へ日參と云つて、柳原へ夜應に出ることになつた。けれどもおはまはどうしても往來の人を呼ぶことが出来なかつた。そんな事ではいけないと言はれて今度こそは思ひ切つてと思つて居る所へ一人の男が通り掛つた。おはまはバラバラと其所へ走つて出た。

「アノ旦那様、お待ちなすつて下さいまし」

男の袖を掴んだ。男といふのはモウ五十五六、足を停めておはまを見て居たが

「アハ、ハお前は夜應だね、私のやうな老人を捉まへても仕様がな、私も宜い年をして夜應も買へまい、放してお呉れ」

「ハイ、相済みませんが、實は良人に患はれまして、其日の生計に困るものでございま

すから……」

「ハ、アそれは氣の毒な……待ちなさい、では私は遊んで行く譯には往かないが……」
云ひながら懐ころから取出した財布、中から錢を出して

「失禮だが此處に一分ある、之を上げるから、御亭主に何か口に合ふものでも買つて上げてお呉れ」

「ハイ、有難う存じます、何とも相済みません、それでは折角のお志、頂きます」

おはまは其の錢を受取つて押賣いた。

「お前さんはまだ此んな事に馴れないやうだが……」

「ハイ、今晚初めて出て、貴下を初めてお呼び止めましたので」

「アハ、夜鷹の店隣きか、併し此んな事を長くやつて居ると身體の爲に良くない、早く廢めなさいよ」

「ハイ有難う存じます」

男は酒にでも酔つて居るか、ヒョロ／＼しながら行つてしまつた、おはまは跡を見送つて

「何といふ親切なお方であらう、お金を下さつた上に御意見までして……此んなことをしたくはないけれど……」

おはまは男の後ろ姿を見送つて兩手を合せて伏し拜んだ。

(五) 舊主の情
夜鷹煙草

「ア、彼の御方のお陰で身を汚さないで済んだ、何處の御方であらうか……」

歸らうとして何気なく足許を見ると、何か黒い物が足の所に落ちて居る。拾ひ上げて見ると、紙入だ

「オ、是は紙入、今の御方に違ひない、跡追駈けて……」

おはまは直ぐに駈出して見たがモウ其の男は何處へ行つたか分らない。

「ア、困つたことだ、何方へお出になつたのだらう……お困りだらうからお届け申して上げやう……と云つた所で何處の御方か分らず……中を見れば分るだらうが中を見るのは……」

暫らく躊躇つて居たが、中を見たら何か手掛になる物があるだらうと思つたから、思ひ切つて開けて見ると、二十兩ばかりの金の外に書付が二三本あつた。それを兩國村松町相模屋幸兵衛といふことが分つた。

「村松町の相模屋さんといふ御方だと見える、是から一旦歸つて出直してお届け申して上げやうか……イヤノ、さうして居ると遅くなつて、心を見られるのも嫌だ、直ぐに是からお届け申さう」

おはまは其の紙入を懐中へ入れた儘急ぎ足で兩國の方へ來た。村松町を探して見ると分つた。

「御免下さいまし」

モウ相模屋では半分戸を締めて居たが、番頭らしい男が出て

「へえお出なさいまし、何方様から……」

「旦那様はお歸りになりましたか」

「へえ旦那様は今お歸りになつたが……」

「それでは恐れ入りますが、一寸お目に掛りたくございます」

「何方様ですか、御名前を仰つしやつて……」

「それではアノ柳原で御目にかゝつた者だと云へば分りますから」

「へえ柳原で……御待ちなさい」

番頭は奥へ來て其の通り告げた。

「柳原で……」

幸兵衛ハツとした。今柳原で逢つた夜鷹だらう、どうして訪ねて來たか、跡でも尾けて錢でも強請に來たか、逢はなかつたらどんなことを云ふか分らない。此方は夜鷹など

を買った覚えはないが、店の者に然う思はれてはならないと思ふから店へ出て来た。
「私が幸兵衛だが……」

「オ、旦那様、先刻は……」

と云ひかけるのを幸兵衛は眼をパチ／＼とやつた。おはまは早くも察して

「誠に失禮でございますが、今晩私は柳原の土手で拾ひ物をいたしました、何誰の物やら分りませんから、悪いと思ひましたが中を開けて見ますと、此方様の物といふことが分りましたので、直ぐにお届け申しました、どうか之をお受取下さいまし」

と懐中から紙入を出してそれへ差出した。幸兵衛は二度ビックリした。夜鷹が何か強請に来たと思つて驚いたのは、さうでなく自分が落して今心配をして居た金を届けて来たのであるから案に相違しておはまの顔を見詰めて居たが、ハタと膝を打つて

「イヤどうも恐れ入りました、マアお上り下さい、其所では話が出来ない、サア此方へ……番頭どん、お前何をして居るんだ、何故早くお上げ申さないのだ、氣の利かな」と

番頭驚いて、眼を皿のやうにして居る。

「どうも初め御目にかゝつた時から御様子に分つて居りましたが、能くお届け下さいました、實はの、今夜は他所で招かれて酒に酔つて居たので、家へ歸つて来て見ると紙入がない、ナニ金は僅だから宜いけれども、中の書付は大切なもの、それを紛失しては困ることがあるので今心配をして居た所、どうも有難うございました」

「其の御禮では恐れ入ります、それでは私はお暇をいたします」
歸りかける袖を取つて

「マア待つて下さい、少しお聞き申したいことがあるから……」

「ハイ……何でございますか……」

「御話の御様子では、御亭主が御病氣のやうだが……」

「ハイ、永い間の患ひで困つて居りますので、つい悪いと知りつゝ今夜初めて彼のやうなことを……」

「ア、其事を言ひなさんな、お前さんのお志は、此の紙入を持つ来て下さつたのでよく分つて居ります、で何ですか、御亭主は何の御稼業で」

「ハイ、此方様は煙草屋さんのやうでございますが、私共も煙草屋さんに奉公をして居たことがあるので、今でも煙草の小賣をして居ります直七と申す者でございます」

「エ、直七……」

幸兵衛の顔の色は變つて思はず膝を進めた。

「直七さん……お前さんは永い間夫婦になつて居なさるか」

「イエ、アノ夫婦になつて一年ばかり、實は何をお隠し申しませう、私は元小山の宿に茶店を出して居りましたが良人が宇都宮へ行つて江戸への歸り、私共へ寄つたのが縁となり、夫婦になつて江戸へ出て参りましたが、其の御主人様からお預り申した五十兩の金を使つてしまひましたので、働いてお詫言、お返し申しに行かうと云つて居る内に今度の患ひ、其の生計にも困るやうになりました、是も御主人様の罰であらうと良人

も後悔をして居ります」

語り終つておはまはソツと涙を拭いた。

幸兵衛は考へて居たが、聽てホツと息を吐いて

「さうでございましたか、併しお前さんは感心だ、能くさうして御亭主にお盡しなされる。……實はな、同じやうな話もあるので、私の家にも一人手代が居りまして煙草の仕入の金を預けまして、旅へ出してやつた。それツきり戻つて参りません、其の金は惜しくはないが主人の金を使ひ込むやうなことでは其男の將來が案じられます。それにお前さんだから話をするが、私に娘がある、今年十八になる一粒種、其の娘の實は婿にする積りで當人にも言ひ聞かせてあつたのに、どうしたことかそれツきり歸つて来ないと云ふのは、大方外に女でも出来て其の爲めに金を使つて歸ることも出来ず定めし今時分は其の日に困つて居ることであらうと思ふと、長い間手許で育てただけに可哀想でございますが、是れも道に背いた天罰と諦めるより仕方がございません。只親の身として

可哀想なのは娘、其の手代を良人と一圖に思ひ込んで、モウ其の當時は毎日泣き明して居りましたが、此の頃はブラ／＼病、それを見るのがいぢらしくつてなりませぬ……アハ、ハ、イヤ下らぬ自分の家の内幕話、飛んだ失禮をいたしました」

云ひながら何か脇を向いて金を包んで居たがおはまの前へ置いて

「お内儀さん、是はホンの儲だがどうか其の亭主の直七さんにかけて下さい」

「イ、エ、私はさういふ物を頂かうと……」

「さうでもあらうが、物には謝するに禮あり、ホンの禮の印、どうか納めて下さい」

「ハイ、有難う存じます」

「餘計なやうだが、是からお前さんもアンナ事は亭主の恥、廢めるやうにして直七さんとやらを大事にしてやつて下さい」

「ハイ、有難う存じます。それではお暇いたします」

おはまは何か心に懸るやうに思ったが、其の紙包を押頂いて相模屋の店を出た。おは

まは急いで歸つて來た西町の家

「お前さん無淋しうございましたらうね」

「ナニニ淋しいことはないけれども餘り歸りが遅いから、どうしたのかと思つて心配をして居た、どうしたのだ」

「ハイ……」

おはまはなまじ隠しても、何日か一度は知れること、寧ろそのこと打明けた方が直七も心持が宜からうと思つたから

「お前さん實は何も彼も隠さず云つて仕舞ひますが、實は斯う云ふ譯でございます」

と柳原へ夜鷹に出たこと。紙入を拾つて届けに行つたことを話しをした。直七は驚いたやうにおはまの顔を見て居たが

「お前に苦勞をさせるのは誠に濟まないけれどもおはま、そんなに身を落してまでも生計を立てることはない、食べるものを食べないでもそんなことをしないのが女の様、お

前の志は有難いがモウ／＼決してそんな考へを起して下さるな」

「ハイ濟みません、悪うございました。是からは決してそんなことはいたしません」

「さうしてお呉れ、けれども能く其紙入を届けてやんなすつた、何處の御方だえ」

「ハイ、兩國村松町の矢ッ張煙草屋さんで相模屋幸兵衛さんと仰しやる御方」

「エ、ッおはま、其の方はアノ村松町の相模屋幸兵衛……」

直七の顔は見る／＼青くなつた。

「お前知つて居る方かえ」

「知らないで何とするものか、其の相模屋さんが私の御主人だ」

「ヒエーッ……アノお前さんの御主人……」

「ア、面目ない、定めて憎い奴、罰當りと思召したであらう」

「さうでございました、道理でそれとなしに自分の家にも手代があつたが、仕入の金を持つた儘歸らぬ、大方今自分は困つて居ることであらう、主人は何とも思はないが、道

に背いた天罰であらうと仰しやつてでございました、能く似た話と思つて居りました
が、矢ッ張り貴下のこと、それとはなしに仰しやつたこと、ございましたか」

おはまも直七も暫らくは涙に暮れて居た。

「それで歸る時に之は禮の印と云つて下さつた此の紙包……」

取出したのを開いて見ると五十兩の金包。紙に走り書に、後悔なされ候はば稼業に精を出し辛抱なさるべく貞節の女房を大切になさるべく候、といふやうなことが書いてある。二人は呆れて顔見合せて居たが

「ア、濟まない／＼、それでは矢ッ張私といふことを知つて下さつた此の金、資本にして稼業に精を出せとの御志、御情け深い旦那様のお金を使ひ果した不忠者、ア、濟まない、旦那様、どうか御勘辨を願ひます」

と兩國の方へ手を突いて禮を云つて居たが、果ては堪らず男泣きにそれへ泣伏した。

(六) 納まらぬ女の胸
悪漢の強請

それから夫婦は力付いて、直七の身体も日増に快くなつた。動けるやうになつたから直七は表へ小さな家の明いたのがあつたから、それを借りて、五十兩の金を資本に小さなながらも煙草の店を出した。是れで安心と思つて居ると、人といふものは善い事は言はない。夫婦の表店を出したのを嫉んで、元の長屋に居た夜鷹のお松といふ女が、アノ煙草屋の内儀さんは夜鷹だといふことを言ひ觸らしたから、忽ちそれが評判になつて、夜鷹煙草屋、夜鷹煙草屋といふやうになつて、夜鷹煙草といふ名を取つた。内儀さんといふのはどんな女かとおはまを見ながら煙草を買ひに来るものが多いから店は繁昌をするが、直七もおはまも夜鷹といはれるのが心苦しくつて堪らなかつた。殊におはまは自分さへ彼んな所へ出なかつたら悪んな紳名は取らなかつたものを、飛んだことをしたと思つて、毎日のやうに直七に詫をする、直七は直七で

女 達

「ナニ身を汚したといふ譯ではなし、お前が柳原へ出たばかりに御主人にも會つて、此の店を開くことが出来たのだ、決して悪くは思つて居ない」

と笑つて呉れるが、おはまの腹は納まらなかつた。それにモウ一つおはまには心の苦しみがあつた。それは相模屋の娘が直七と許嫁で、未だに私といふものがあると知らず、直七を慕つて歸りを待ち詫びて、此の頃では愚つて居るといふことを聞いては、女だけにおふじの心を察して、直七には一言も此の事ばかりは明かさなかつたが、獨り胸に秘めて涙に暮れて居た。

店を出してから二ヶ月ほど経つた一日。店先へズイと入つて来た男。モウ秋の末ソロソロ寒い風が吹いて来やうといふ時分だといふのに汚い單衣一枚に三尺帯を尻こけに締めて、手拭を被つて居る、直七が店に居たが

「へエ入ツしやいまし、何を差上げます」

「乃公ア煙草を買ひに来たんぢやアねえ、お前ン所の女房を買ひに来たんだ」

「ヘー妙なことを仰つしやいます、手前共では煙草は賣りますが女房は賣りません」
「何を吐かしやアがるんだ、おはまを貰ひに来たんだ」
「エ、ツ……」

女

「ヤイおれの面を見忘れたか」
と云ひながら被つた手拭を取つたのを見ると、おはまの元の亭主の小山の權太郎といふ奴であつた。

造

「ヤアお前は……」

男

「サア野郎、能くもこんな所に居やアがつた、能くも手前はおれの女房のおはまを連れて逃げやがつたな、サツサとおはまを此處へ出してくれ」
大きな聲で怒鳴つた。其の聲を聞きつけて出て来たおはまは

「アレお前は權太さん」

「ヤイお前はおはま、手前も此處に居やアがつたのか、モウ勘辨ならねえ、手前達は姦

通だ、どうするか見やアがれ」

と腹巻の間から抜き放つた匕首。脅しの爲めかダルク振廻して居る。

「權太さん、何もそんなに大きな聲で怒鳴つて暴れなくなつて分るぢやアないか」

「何を吐しやアがる、能くも乃公の面へ泥を塗りやアがつたな」

「モン權太さん、お前姦通だの、面へ泥を塗つたのといふけれども、私はお前の女房ぢやないよ」

「何だと」

「幸手屋の親分から五十兩といふ手割金をやつて、立派に縁は切つて、お前から證文を取つてあるよ、さうしてお前の手を切つて此の直七さんと夫婦にして貰つたんだよ、それも皆なお前の心柄が悪いからさ、それでもお前は姦通だといふなら出る所へ出て砂利を掴み合ふぢやないか、私の方には親分から送つてよこしたお前の證文があるんだよ、そんなことを云つたらお前の爲になるまいよ、それより困るから錢を貸して呉れといふ

「なら幾らか上げるから、店先で騒いでお呉れでない」

斯うなると女の方が気が強い。直七は人の好い男だから唯ブルブル震へて眞青になつて居る。權太は何と思つたか匕首を鞘に納めて

「さうか成程手前の方で然う分つて出りやア勘辨してやる、サア錢を出せ」

おはまは幾らか紙に包んで黙つて渡した。權太は披いて見て

「フマン、おはま、只た一兩か」

「不足かい、私の方ぢや思ひ切つて上げたのだよ」

「仕方がねえ、無えより増した、貰つて置いてやらア、ヤイ野郎今日の所は歸つてやる、又チヨイ／＼来るから繕う思へ」

「モウお出でになるには及びません」

「何を云やアがるんだ」

權太は冷笑つて立去つた。それから三日に上げず權太は店先へ来ては大きな聲で怒

鳴る。證文があるから出る所へ出て争へば、恐れる所はないのだが、悪い奴だからどんな事をするか知れない。第一店の邪魔になつて仕様がなから、其の度におはまは幾らかづつの小遣をやつて追歸して居た。

(七) 貞婦の自害

一夜雨のシト／＼降る時であつた。直七は用達から歸つて来た

「おはま、今歸つた、おはま」

聲を掛けるといつも返事をして直ぐ出迎へに出るおはまが返事をしない。

「おはまは不在かしら……」

店から上つて奥へ来て見ると、おはまは佛前の方に向つて突伏して居る。

「おはまどうしたのだ、眠いのならチャンと床を取つて寝れば宜いのに、そんな所に突伏して風邪でも引くといけない、エ、おはま、おはま」

と云ひながら肩へ手を掛けて揺つて見たが返事もしない。變だと思つて抱起して見ると
口首を咽喉に突立て、立派に自害をして居る。膝から墨は唐紅

「ヤ、ツ、おはまつ、こ、これはマア何としたことだ」

直七はビツタリそれへ腰を抜かして仕舞つた。

「おはま何で死んだのだ、何で死んだのだおはま、おはまやーイ……」

聲を限りに呼んだがモウ時過ぎたと見えて何の應もない。直七は涙を流して四邊を見
廻すと、佛前に一通の書置がある、取る手遅しと披いて見ると、

「一筆示し上げい、私事御前様と御縁あつて夫婦に相成り候てより今日まで御互に助
け合ひ楽しく暮して参り候處、小山の權太郎事縁を切り候にも拘らず日々店へまゐり
て強請がましき事申し候て店の妨げ致し候事誠に心憎く御前様の御出世の妨と存じ
こよひ新堀端にて權太を殺害……」

「ヤ、、、、、ツ、それでは今夜歸りに新堀端に人殺しがあつたといふことを聞いたがお

はまが權太を殺したのであつたか、飛んでもないことをしてしまつたな……」
と直七は手を震へて其の先へ目を通した。

「尚ほ御主人様の御志にて折角店を持ち候てやれ嬉しやと喜び申候甲斐もなく夜
鷹煙草といふいやな癖名を取り候ことも皆家の爲とは申しながら私の至らぬ考へより
御前様に耻をおかへせ申すやうなことに相成り私の心のくるしさ、其の上につぞや御
主人様の御宅へまゐり候節伺ひ申候に御主人様御嬢様には御前様とは許嫁の御仲にて
御前様の御歸りを日々お待ち詫びなされ此の頃ではそれが爲め御身體もお悪き由、御前
様が私と夫婦になつて店を持ち候と御聞きなされ候はゞ定めし御嘆きのこと、女の心
女ならではの分り申さず御嬢様の御心を御察し申上げ候へば空おそろしく日々涙に暮れ
申候、私さへなくば御前様は御嬢様と御夫婦となり相模屋様の御跡目となりて御出世
の出来る身を私ゆゑに世間を狭め候と是亦私としては心苦しく候次第私一人の身を縮
め申し候へば、三方四方圓く治まると、覺悟をきはめ申し候又權太を殺し候こと大膽

な奴と思召し候はんも是も御前様の御行末を思ひ候ため彼是れ思ひめぐらし候て逆も生きて居られぬ身に候へば自害して相果て申候、何卒私亡き後は此の事御主人様へ御話し申し必らず御嬢様と御夫婦になり行末長く仲好く御暮しなさるべく草葉の蔭より御出世を祈り居り候、あはれと思召し候はゞ只一遍の御回向のほど願上げな、まだまだ申上度きこと山々候へども只涙のみ先立ち心もみだれ候まゝ惜しき筆止め申候も、はまゝ直七どの」

直七は遺書を顔に當て、泣出した。

「何といふことをして呉れたのだ、權太は素より悪い奴死ぬほどならお上へ願つて出ること出来るのに人殺しをするなど……おはま、何で短氣なことをして呉れたのだ、相模屋のおふじさんに義理を立ててくれたお前の志、お前はそれで宜いか知らないが私をどうする積りだ、お前と別れる位なら御主人様のお金を使つたり、小山邊りから一緒に連れて来るやうなことはしない、乃公も一緒に死にたい、おはま、恨みだ、恨み

だ、何で死んでくれたのだ……」
死骸に縋つてワツと泣出した。此の聲に隣り近所の人も来て見ると此の有様に驚いて騒ぐのを

「皆さん騒いで下さいますな、是には幾々深い譯がございます、何れ御話しいたしますが、私はチョツト行つて参りますから、暫くの間皆さんで、死骸の番をして居て下さいまし」

近所の者は驚いた。死骸の番をさせらるるのは餘り有難くない。飛んだ所へ来たと思つたがいけませんといふ譯には行かない、直七は遺書を持つて飛んで来た村松町の相模屋の家。詮半分詮半分涙と共に委細を物語つた。遺書を見て幸兵衛も女房もおふぢも泣いた。直ぐに幸兵衛は直七と一緒に西町の家に来て色々の相談。夜の明けのを待つて奉行所へ訴へて出た。奉行が調べて見ると、遺書はあり、權太から入れた證文もあり、權太の悪事は奉行の方にも分つたから權太の死骸は取捨になり、殺した當人は自害をして

居るのだから、直七には何の咎めもなく、改めて奉行大岡越前守はおはまの貞操を賞めて其死骸に對して若干の褒美を賜つた。死骸に褒美を呉れるなどいふことは例のないこと。越前の守もおはまの貞節に餘程感したものと見える。相模屋幸兵衛が萬事を引受けておはまの葬儀は立派に行つて遺書にもあるのだからと云ふので、改めて相模屋の跡目としておふぢと夫婦にさせた。おふぢは

「誠にかういふことになつたのもおはまさんの志だから、私は何處までもおはまさんに代つて直七さんに仕へる積りゆゑ、名前もはまと改へたうございます」

といふので幸兵衛も直七も喜んでおふぢはおはまと名を改めた。其の後相模屋では煙草の葉を衣にした女達磨を赤く染出した暖簾を店へかけることにした。是れは直七の考へではおはまの姿を現はしたものであつたが、是れが評判になつて相模屋の店は日に日に繁昌した。幸兵衛は隠居をして直七が跡目となつたが夫婦仲も好く、忘日々々のおはまの追善を怠らなかつた。

(をばり)

縷斗菜の花

(一) 及ばぬ戀

享保の頃信州小諸の在に治右衛門といふ大きな百姓があつた。十數代続く財産家で、舊家のこととて土地の總てのことは此の治右衛門の聲が掛らなければ纏らぬといふほどの人望家であつた。此の治右衛門にお總といふ今年十八になる娘があつた。妙齡ではあり、其の容貌は鄙には珍らしいほどの美しさであつたから、土地の若い者の内には此のお總に胸を焦すものも多く、婿に來やう、嫁に貰ひたいと言うて來る者も數多くあつたが、お總は一人娘の我儘に彼是れと不足を言ひ立て、良人を定めることを好まなかつた。唯不思議なのはお總は縷斗菜といふ草を自分の部屋の一ぱいに植ゑて其の花の咲くのを見てはそれを無上の楽しみとして居た。花の咲かぬ頃には氣が浮き立たず、花の

盛りになつて、此の花の咲くを見ると、心浮き立つて、其の花を摘んで頼摺りさへすることもあつた。

と此のお龜に戀して胸を焦す若い者の多くある中に五兵衛といふ今年二十五になる若者があつた。お龜の美しさに戀風の身に泌みては、蹴取る間も眼の前にお龜の姿がちらついて、時には畑の中に立つた儘に思ひに耽る時もあった。思ひに堪へ兼ねて五兵衛は、或る日人の目を避けてお龜に思ひの丈を記した文を送つた。けれどもお龜からは何の返事もなかつた。それも其筈此の五兵衛は年こそ若い、幼さい時に罹つた松皮疱瘡の爲めに二目と見られぬ顔に、身分は他人の田畑を耕して僅かの錢に其の目を送つて居る小作の男であるから、何で容貌自慢の我儘娘のお龜が色好い返事をするものではない。何の返事もせず其儘にして置いた。

五兵衛は今に返事を呉れるか／＼と待つて居たが其儘であつたから又一通の文を送つた。けれども返事がなかつた。三度送つた。それでもお龜は五兵衛の黒い菊石面のこと

を考へると、震へる程に嫌であるから封も切らずに其儘文を捨て、置いた。

「ア、お龜さんはどうして返事を呉れないのか、彼れほどに書いて送つたに、何ともいふて呉れぬとは情けない人だ……併し先は財産家の大百姓の娘、此方は小作人、身分が違ふから私を嫌ふのか……それとも此の顔、二目とは見られぬ人からいられる此の不容貌を嫌つてお龜さんが返事を呉れぬのか、ア、八歳の時に罹つた疱瘡がいつそ口惜しい……それにしても三度も四度も送つた文、嫌なら嫌といふて返事ぐらゐは送つて呉れても宜さうなもの、嫌だといふなら諦めもしやうに……とはいふもの、嫌だといはれてもアノお龜さんのことは思ひ切れない、ア、どうかしてお龜さんから返事を貰ひたいものだ……此上は仕方がない、治右衛門さんの家へ行つて、お龜さんに逢つてそれとなく話をして見やう、それが宜し。」

用に託けて五兵衛は治右衛門の家へ来た、今門を入らうとするとお龜は門の所に立つて居た、五兵衛は思はず断けるやうに入つた。

「お嬢さま、お龜さん……」と呼んだ、呼ばれてお龜は振返つて見ると、五兵衛が立つて居るから、ハツと思つて物に怖えたやうに駈け出した。

「アツお龜さん、話をしてえことがござえますだ、モシお嬢さま……待つて下せえまし」物狂はしいやうに呼んでお龜を追つた。お龜は

「アレツ、五兵衛が……」細を裂くやうな聲で叫んで家へ逃げて入つた、五兵衛も立關の所まで追駈けて行つたがお龜の様子に仰々しいので、ハツと我れに返つて、咎められて恥を搔いてはと思つたから、力なく治右衛門の家の門を出てしまつた。

「ア、情けない、聲を掛けたら、笑ひ顔一つくらゐ見せて呉れさうなものだに、人の顔を見ると、犬にでも追はれたやうに、聲を立て、逃げて入るとはお龜さんも情ない人だ……それぢや此の五兵衛を嫌つて居るのか、嫌はれては仕方がない、諦めやうか……イヤくどうも彼の女のことばかりは諦められない、假令身分が低からうと、此の顔が二目と見られないやうな不容貌でも、逢つて沁みく心の打明けたら又好い返事をし

て呉れやうも知れぬ、此儘諦めてしまふやうでは本當にお龜さんを想つて居るのではない、昔、深草少將は百夜通つたといふことを名主様の話に聞いたこともある、俺も幾度でも逢つて、心を打明けたら、お龜さんも承知して呉れるかも知れない、さうだ、何でも一心は岩をも徹すといふだから、何處までもやつて見やう」飽まで念の深い五兵衛は、其後も折があつたら、お龜に言ひ寄らうと、用に託けては治右衛門の家へ來ては様子を探つて居た。

(二) 不容貌の怨

それから二月ばかり後のことであつた。お龜の部屋の前には、お龜の好きな繡斗菜の花は今を盛りと咲いて居る。治右衛門の家では何か祝事があつて、村の者を大勢招いて、心ばかりの馳走をすることになつた、五兵衛も平常治右衛門の家の小作をして居る縁で其の夜に招かれたから、喜び勇んで其席に列なることになつた。

膳は一同の前へ運ばれた。お龜も其席へ出て下女の指圖などをして居たが、今日はお龜は平常にも勝して綺麗に化粧をして、衣服さへ好みの派手な模様の振袖を着て居る。其の美しさに村の者も氣を奪はれて箸取ることさへ忘れるほどであつた。

「お嬢さんの綺麗なこと、日本中探しても二人とはなかんべえ」

「さうだによ、小野小町ツちう女は美しい女だといふことだが、お龜さんのやうに美しはなかんべえ、斯んな美しい女を女房に持つたら、どんなに嬉しかんべえ」

「さうだ、乃公が一つ治右衛門さんに話を打つてお龜さんの婚になるべえと思ふだ」

「ウフ、ツ、コレ奎十、馬鹿吐かぬえものだ」

「何故」

「何故つて、汝鏡ツちうもの見たことがねえと見えるな、汝の面見ろ、男でも逃出すだ、アンナ綺麗なお龜さんの婚になるなんて、アハ、、、生れ變つて来るが宜いだ」

「コレ久左衛門、さう人の面の讒訴いふものでねえ、乃公の面は宜くねえさ、宜くねえ

が五兵衛どんより宜かんべえ」

「そりやさうだによ、五兵衛どんより悪かつたら化物だ、アハ、、、」五兵衛の眼はギロリと光つた。何の氣なしに冗談に言つたのだが、現在惚れた女の前で面のことを言はれて五兵衛は凄く眼に若い者を睨めた。

「五兵衛どん、怒つて乃公達をさう睨めるものでねえ、冗談だによ、五兵衛どんがさう睨んだ顔は、繪に描いた不動様のやうで、お龜さんが見たら怖がつて怯えるだね、……」

「お龜さん」お龜はニッコリ笑つて、此の上何か言はれるのも煩さいと思つたから、其儘座を立てて庭の方へ出て行つてしまつた。

五兵衛は黙つて、盃も手に取らず、箸も手に取らずに考へて居たが、何か心に領いて自分もスイと席を立つた。庭へ出て来て見ると、其處にはお龜が竹んで居た。ツカツカと側へ寄つて

「お龜さん」お龜は振返つて見ると五兵衛であつたからハツと胸を躍らせた。

「お龜さん、お前さんといふ人は情ねえ人でござえますぞ、私が何遍も〜手紙を上げたのに、一遍も返事を呉れねえツちうのは、餘り情ねえではござえませぬか……、お龜さん、斯う言つては誠に羞かしい話だが、どういふものかお前さまのことは忘れることが出来ねえですが、どうか私の女房になつて下せえまし、お願いでござえます」お龜は黙つて居る。

「それは成程私はお前さんの家の小作をする男でござえます、身分は低い、身分は低うござえます、又顔も此の通り二目と見られねえやうなものです、今も今とて座敷で久左衛門の奴が、不動様のやうだと言つたですが、成程繪に描いた不動様のやうに怖い面ですが、けれども心まで怖くはござえませぬ、正直者ですが、曲つたことは下駄の曲つたのも嫌ひですが、……私はハア寐ても覺めてもお前さまのことは忘れることが出来ましねえ、どうか女房になつて下せえまし、一日でもお前様と夫婦になることが出来たら、私は死んでも宜いですが、斯うしろと言へば何でもお前さまの言ふ通りにするでが

す、……お龜さん、コレこの通りですが、可哀想だと思つて私の言ふことを聞いて下せえよう、お龜さん」兩手を合せてお龜を拜んだ、其の眼には涙さへ浮べて居る、けれどもお龜は笑ひ顔一つ見せなかつた。

「五兵衛さん、モウそんなことを言つてお呉れでない、お前さんから三度も四度も文をお呉れだつたが、返事を上げないといふのは、私は百姓の娘でも、不義密通はしたくないのだよ、私は私の勝手に男を定めるやうなことはしない、お父さんが定めて下さるのに任せてあるのだから、折角だけれどもお前さんの言ふことは聞けないよ」膠もなく言つてお龜は行かうとした、五兵衛は慌てゝ其の袖を取つた。

「待つて下せえましお龜さん……是れほどに言つても私の言ふことは聞いて……お前さまは、お前さまは……」

五兵衛は舌が釣つたかと思はれるやうに言つて兩手に確と袖を握つた儘ヂツと凄い眼にお龜の顔を見入つた。

「何をするんだよ、人に見られたらどうするんだよ、放してお呉れツ」強く言つて取られた袖を拂つた。拂はれて五兵衛は思はず前へのめらうとした。其の間にお龜は駈けるやうにして自分の部屋へ逃げて入つてしまつた。

(三) 草履の鼻緒に縋斗菜の花

狂はんばかりに心の中を明かしてもお龜には少しも五兵衛の情は感じなかつた。五兵衛は家に歸ると、其處へ倒れるやうに坐つて男泣きに泣いた。主人の治右衛門に話をして見た所で、小作の男と財産家の大百姓、身分の違ふ自分を娘の婿にして呉れやう筈がない。交渉つて見るだけが無駄である。モウ斯うなれば破れかぶれ、一旦思つたことは徹さすには置かぬ、力づくでも……と戀に眼の眩んだ五兵衛は全く思慮を失つたのであつた。其夜更けるのを待つて治右衛門の邸へ忍び入つた。豫て案内を知つて居るから、お龜の部屋の庭の方へ忍んで来て様子を窺つて居た。

夜は次第に更けて來た。家内は寢鎮つたものと見えて何の音も聞えない。仕合せ宜くと雨戸へ手を掛けて一つ捻れば、百姓業をして力があるし、締りも十分ではなかつたものか、戸はたわいもなく開いた。五兵衛は中へ入つた。寢音を盗んでお龜の部屋の障子の外へ來た。

時にバタ／＼と聲音がして人の來る氣配がした。五兵衛は南無三と思つて、慌てゝ逃げやうとしたが遅かつた。其處へ來たものはつと足を止めて、

「誰だい、誰だね」と聲を掛けた。其の聲は確かにお龜の乳母のおもよといふ力自慢の五十ばかりの女であつた。お龜の次の間に寢て居たのであつたが、便所へ行かうとして此處へ來たものであつた。

「誰だえ」又聲を掛けながら暗の中におもよは透すやうに見て、

「お前五兵衛どんだね、五兵衛どんでねえかね」モウ五兵衛は絶體絶命であつた。無言の儘にズツとおもよの側へ寄つた。とモウ左の手は腰に掛つて、帯の所に挟んであつた手

拭を執つた。

「五兵衛どんだ、五兵衛どんだ、何だつて夜陰深更雨戸などを開けて入つて来た」といふ聲が切れるか切れぬ内に、五兵衛は其の手拭をおもよの首へ掛けた。

「アレツ、何をするだ」といふのも構はず五兵衛は力に任せて絞め付けた。力自慢の女だけに其の手拭を拂ひ退けやうと焦つた、けれども幾ら力自慢でも男の五兵衛の力には敵はなかつた。忽ち五兵衛の爲めに絞付けられ、虚空を掴んで息は絶えた。

おもよの苦しい聲にお龜は眼を覺まして、床から出て廊下を出た。其處にはおもよが倒れて居て、五兵衛は逃げて行く。

「アレツ……誰か、誰か来てお呉れ、誰か来てお呉れツ」金切聲を揚げて人を呼んだ。此の聲に驚ろかされて家内の者は、忽ち其處へ集つて来て見ると、雨戸が破れて居て、廊下には乳母のおもよが氣絶をして居て、お龜は寢巻の儘震えて居る。治右衛門の指圖で若い者がおもよの介抱をしたが、強く絞められたものと見えて、それツきり息を吹き

返さなかつた。

夜が明けて治右衛門から此の事を代官所へ届けた。役人が出張して調べて見ると、庭に今を盛りと咲いて居る繻斗菜は踏みじられて居る。役人は役人だけに是れは確かに此の娘に關係をしたことであると睨んだから、お龜に何か心當りはないかと尋ねた、其の時にお龜は

「私は見た時にはモウ賊は逃げて行く所でございますが、其の後ろ姿がどうも五兵衛のやうでございました」といふことを述べた、役人は直ぐに五兵衛召捕の手筈をした。

五兵衛は夢中で自分の家へ歸つて来た。暗の夜のことであるから、自分であることは分るまいと思つたから其儘床に入つて枕に就いたが、一人を殺したのであるから、どうしても眠ることは出来なかつた。夜が明けて手廻りの物を纏めて逃げやうとする所へ、表と裏から飛込んで来た捕手の役人は、譯もなく五兵衛を召捕つて代官所へ引いて来た。

「五兵衛、治右衛門方へ忍び入り、乳母もよを絞殺したのは、其方であると申告した者があるが、確かに覚えあらう、白状をいたせ」五兵衛は選れるだけは選れたいと思つた。

「イヤ覚えはござりませぬえ、私は百姓でござえまして、治右衛門様の所の小作をして居るのでございますから、何で其の世話になる人の所へ泥棒に入る譯がございませぬ」

「イヤ、賊に入つたとは中さぬ、物を盗むつもりで忍び入らぬでも、娘を盗まう積りで忍んだであらう」

「イエ左様な覚えは……」まだ言葉の切れない内に

「黙れーッ」と代官は大きな聲で怒鳴り付けた。

「覚えはないとは中さぬぞ、コレツ五兵衛、其方がもよを絞殺した證據があるぞ、之を見い」と言ひながら代官は傍らに置いてあつた草履を手に取上げた、五兵衛が見るとそれは自分の平常履く草履であつた、

「其の草履は……」

「其方のであらうな、他の人の物とは言はれぬぞ、其方を召捕つた時に取上げて参つたのであるぞ……コレ五兵衛、此の草履の鼻緒の間に縷斗菜の花が挟まつて居つた、是れ取りも直さず其方が、治右衛門方へ忍び入りし時、庭に咲く縷斗菜を踏みしだき、其の花が鼻緒に挟まりしものであらう、是れが何よりの證據、如何に隠すとも、天は罪人と庇はぬぞ、遁れぬ所ぢや、白状せいッ」のつびきならぬ證據に、見る／＼五兵衛の顔は青くなつて行つた。

「どうぢや、恐れ入つたか」モウ仕方がないと思つた。

「恐れ入りましたとござえます、モウさういふ證據がある上は隠しても仕方がございませぬえ、庭の草の花が草履に付いて居るとは思ひませぬでした、どうかお處刑を願ひます……私は死にます、首を斬られて死んで仕舞つた方が宜うございます、けれどもお代官様に伺ひます」

「何ぢや」

「縷斗菜の花が草履に付いて居たのが證據にはなりましたが、私がおもよさんを絞殺したのだといふことを、申告したものがあると今お代官様が仰しやいました、それは誰でございますか」

「治右衛門の娘ぢや」

「エツ、治右衛門の娘……アノお龜さんが……」

「さうぢや、逃げて行く後姿が其方に違ひないと申したぞ」

「へエ、お龜さんが私だと……」五兵衛は咳くやうにブルブルくツと身を震はして、治右衛門の家の方を向いて、睨めるやうに凄惨な眼で暫らくの間無言の儘見詰て居た。

(四) 死んで怨みを

五兵衛は斬首と極つて、いよく今日は刑場へ引出されて首を斬られることになつた。五兵衛は後ろ手に縛られて悄然と役人に引立てられて定め場所へ坐つた。役人は

斬首に處する旨を申附けた時には流石に五兵衛の顔の色は土のやうであつた。

「五兵衛、上御慈悲を以て何か申し遺すことがあれば聞届け遣はす、何なりと申せ」五兵衛はズイと首を揚げた。

「ハイ有難う存じます、私は獨身者故、別に何にも言遺すことはございませぬが、一言治右衛門の娘のお龜に人に怨みがあるものかないものか覚えて居る、屹度此の恨みは返してやると、どうか傳へて下さいまし、ハイ私の今日首を斬られるやうになつたのも、彼の女の爲め、屹度死んで恨みを返す積りでございませぬ、死ぬ時に五兵衛が、恨んで死んだといふことを忘れずにお龜に傳へて下さいまし、それが私のお願ひでございませぬ、若しお龜に傳へて下さらなければ、貴下もお恨み申します」役人は驚いた、自分まで恨まれて堪るものかと思つた。

五兵衛は散々にお龜を罵つて、深い／＼恨みを呑んで終に首を斬られてしまつた。役人から五兵衛の怨みを傳へられた時には、流石のお龜も治右衛門も色を失つて恐

れたが、日が去るに従つて何事もなかつたので、何時とはなしに其の怖ろしいといふ氣も失せて行つた。丁度其の翌年の五兵衛の首を斬られた當日であつた。寢て居たお龜は急に起上つた。

「五兵衛さん勘忍して勘忍して下さい……ア、ア、苦しい、私が悪かつた五兵衛さん……誰か、誰か早く来て、アノ庭の縋斗菜を捨て、お呉れ、あゝ苦しい」と言ひ続け部屋の中を駆け廻つて居る。家内の者も驚いて、左右から押へやうとするが、其の力は男も及ばぬほどで、押へやうとする者を投げ退け兼ね退けて、

「アレ、其處に五兵衛さんが、五兵衛さん、縋斗菜は皆な捨て、仕舞ひます、誰か、誰か縋斗菜を捨て、お呉れ、アレ、五兵衛さんが……」全くお龜は氣が狂つたのである。部屋を駆け廻つて居たかと思へば、柵木のやうにバツタリと倒れて「ア、苦しい、助けて下さい五兵衛さん、勘忍して勘忍して下さい五兵衛さん、苦し、苦しい」と呻吟くやうに言つて両手で咽喉を搔搔るやうにして居る。

治右衛門夫婦は色を失つた。全く是れは五兵衛の祟りに違ひないと思つたから、家人に命令けて庭にある縋斗菜を残らず掘り返して捨て、しまつた。さうして僧侶や行者を招いて加持祈禱と、様々に手を盡したが、おかめの狂ふ態は少しも變らなかつた。終ひには瘦せ衰へて此世の人とは思はれない。それでも時々起上つては「縋斗菜が、縋斗菜が……」と言ひ續けて居る。今はお龜は苦しみ死をすることを待つより外はなかつた。

(五) 宿を求めぬ旅の尼 娘姿の薬人形

一日の夕方一人の年老つた尼が治右衛門の門邊に立つて宿を求めた。下男の久助といふのが、

「誠に氣の毒だけんど、少し家に取込みがあるだから、泊めて進ぜることは出来ぬえだよ、他へ行つて泊めて貰つて下せえまし」尼の様子を見ながら氣の毒さうに斷つた。尼は途方に暮れた様子であつたが、

「誠に申兼ねましたが、モウ口も暮れさうになりまして、是から他へ参るとしても老人の身體、どうか拵げて泊めて頂きたう存じます」

「困つたね、平常なら泊めて上げるだが、取込があるだからね」

「其の取込といふのはどういふことでございますか、御病人でもございまして……」

「さうだね、お嬢さまが大病で、今にもおツ死にさうで、えら騒ぎ打つてるだからね」

「さうでございませうか、それはく定めて御心配でございませう、さう承はれば尙更泊めて頂きたう存じます、私は佛に仕へる者、其のお嬢様の御病氣の療るやうに御祈禱をして差上げたうございます、どうか御主人様へ御取次を願ひます」

「さうかね、それは有難えことだが……それでは待つて下せえまし、旦那様に話して見るだから……」尼僧を待たして置いて久助は、奥へ来て主人に此事を告げた、治右衛門はどうかして娘を助けたかと思つて居る矢先であつたから、直に尼僧を奥へ通して、五兵衛のことを打明けて話をした。尼僧は暫らく考へて居たが

「それは確かに其の五兵衛とやらいふ人の怨讎の祟りに違ひございませぬ、併しモウ御心配には及びませぬ、私が必ず其の怨讎を退けて差上げますから、私にお任せ下さいまし」言つて尼僧はお龜の枕邊に坐つて三日の間夜も一睡もせず祈禱を續けた。

四日目の朝になつた、

「モウ御祈禱は是れで済みましてございますが、どうか薬人形を一つと、お嬢様の平常召して在つしやつた衣服を出して頂きたうございます」と言つた。言ふが儘に治右衛門の妻は、お龜の衣服を出してやつた。治右衛門は家内の者に命令して一つの薬人形を造つた。尼僧は其の薬人形にお龜の衣服を着せて、それを持つて五兵衛の死骸の埋めてある所へ来た。

墓の前に立つた尼僧は暫らく黙禱をして居たが

「如何に五兵衛殿とやら、其方の戀ひ慕ふお龜殿は今お前の側に埋めて進ぜる。是れで満足であらう、お龜殿は、其方の側に居る、是れで成佛をなされ、南無阿彌陀佛々々々

「と生きた人に言ふやうに言つて、聽て其の薬人形を衣服を着せた儘、墓の下を掘つて、其處へ埋めた。」

不思議や其の日からお龜は、何の囁言も言はなくなつた。グツタリと疲れた身體を床に横へて、スヤ／＼と安らかに寢て居るやうになつた。尼僧は治右衛門夫婦が喜こんで、禮と共に永らく泊つて行けと言つて止めたけれども、五日目の朝になつて、止める袂を振切るやうにして出て行つてしまつた。

其後お龜の病氣は日一日と快くなつて、一月ばかりの後には全く本復をした。ト茲に一つの不思議があつた。お龜の病氣は癒つて物の怪もないやうになつたが、治右衛門の家の土藏の錠前は何時か捻切られて中に積んであつた金箱の中、三つ、三千兩といふ大金が紛失して居ることに氣が付いた。驚ろいて代官所へ訴へ出て、役人が出張して調べたが、外から賊の入つたことに今日まで誰一人として氣の付く者がなかつたのは不思議であると言つて、急に其の賊の搜索に力めたけれども少しも手掛りがなかつた。

それから五年の後であつた。江戸で散切お瀧といふ女賊が捕へられた。其の時お瀧はモウ五十六であつた。其の時に今から五年前、信州の小諸在の治右衛門といふ大家で、娘の病氣を幸ひに、祈禱に託けて入り込み、三日の祈禱をする間に、同類の者と謀し合せて土藏から三千兩の金を盗み出したといふことを白狀した。

全くお瀧といふ女賊は、お龜の病氣のことを聞いて、尼僧に化けて治右衛門方へ入り込んで、此の大金を盗んだのであつた。けれどもそれまでも此の僧が盗んだとは夢にも治右衛門は氣が付かなかつた。それと聞いた時には色を失つて驚いた。けれども賊にしろ、娘はそれが爲めに命を助けられたのであるから、後にお瀧が處刑になつたと聞いた時には、菩提寺でお瀧の爲めに供養の式を行つたといふことである。

此の事があつてから以來此の信州の小諸の地方では、物の怪に祟られた病氣には、薬人形に自分の着物を着せて練斗菜の花の一本を添えて其の恨んで居る者の墓へ埋めれば立所に癒るといふ迷信が遺つて居る。

(をばり)

蟹女のお舟

(一) 一對の夫婦

紀州黒江の浦にお舟といふ蟹女があつた、年は十八、荒い海へ出て漁をする、色の眞黒な漁師達の中へ立ち交つて同じやうな漁の業をして居るが、其のやさしい姿、色の白い美しくい容貌は、龍宮の乙姫が假に蟹女の姿になつて居るのだといふ人の噂も、賞め過ぎた言葉でもないほどに、人の目を惹き、若い者の心を咬るのであつた。此のお舟の家に此頃一人の若い男が食客とも附かず客とも附かず世話になつて居る、凛とした顔は色の白さに一層美しく、女かと思ふほどである。さうして何處となく冒すことの出來ない凛々しさは誰が目にも武士であることを頷かせる。

此の男のことが浦の若い蟹女の噂の中心になつて、お舟の顔を見れば

「お舟さん、お前は好い男を助けなかつたな、彼のやうな好い男と毎日毎晩一緒に居たら、どんなに楽しみであらう、お舟さん、モウ祝言は済んだのかえ、私も彼のやうな好い男を助けたい、羨ましいわな」と言つて笑ひながらお舟に戯ふ、其度にお舟はハツと顔を紅らめて嬉しさに皆な顔を見返すのが常であるが、人の居ない時など何故か一人溜息を吐いては涙ぐんで居る。

此のお舟の世話になつて居る男といふのは、此の夏の暴風雨の時、沖で難破した船の客の一人で、運好くも此の黒江の濱へ打上げられたのを、お舟が親切にも介抱して、自分の家へ連れて来て手當をした甲斐があつて、其の男は元の通りの身體になつて、其れ以來お舟の家の世話になつて居る。お舟には親親が一人ある。お舟の働き一つで其の目を送つて居るものだから何事もお舟の心任せ、若い女に若い男、世の厳しい親なら疾にも其の男を立てて仕舞ふのであるが、何も言はずその儘に見て見ぬ振をして居るのは、お舟はどうやら此の男に氣のあるらしい様子、又是ほど立派な男、漁師の娘には過

「き物と思ふほどの人品骨柄、お舟の亭主ともなつたら親の身として鼻が高いと思つたからである。全くお舟は初めは親切から介抱をしたが、今では戀となつて心底から其の男が可愛くつてく仕様がな、時にはそれとなく情をほめかすけれども、何故か男は少しもお舟の情に感じないものゝやうに取り澄まして居る。」

「人の心も知らない情なしめ、是程思ふ私の心がお前には分らないのかいな」と言つて取付くやうにして言ふこともあるが、矢張り男は唯笑つて居るばかりで取り合はうともしなかつた。浦の人達からは、お舟さんは好い男を助けた、彼の男と夫婦になつたら一對の好い夫婦であらうと、いはれる度に嬉しさが胸を衝いて來るが、男の仕打を考へると、情ないやら悲しいやらで、つい辭がすには居られなかつた。」

此の男の名は栢植要之助といつた。今日も浦の人達に戯はれてお舟は悄然として歸つて來た。母親は用達にも行つたか家には居ず、要之助一人奥の間で、爲すこともなく何か考へて居た。お舟は漁の着物を平常着と着換へて、男の顔を見ると氣も晴々として

嬉しさに要之助の側へ來た。

「要之助さん、退屈でござんせうな」

「退屈といふことはないけれども、何にもせず男の身で斯うして厄介になつて居るのが氣の毒で……」言ひかけるのをお舟は打消して

「イエ〜其のやうな遠慮は要りませぬ、何日までも何日までも此處に居て下さんせ……オ、お茶でも入れて上げませう」男の心を迎へたさにお舟は嚙て茶を入れてそれへ來て、有合せの菓子など取つて男に勧めた、男は始終ニツコリして茶を呑んで居る。其の顔をお舟は蕩けるやうに見惚れて居た。

「お舟どの、何で私の顔を見て居られるのぢや」お舟はハツとして顔を紅らめた。

「アノ何でといふことはござんせぬが、お前が餘り好い男ゆゑ、ツイ……」

「イエ〜颯りものにはしませぬ、本當にお前は好い男ゆゑ、此の濱の女子衆が命まで

もと打込んで、慕つて居るとのことでごさんす」それとなしに自分の心を遠廻しに言つて、眇めに男の顔を盗み見た。

「アハ、又してもお舟どのの戯れごと、何で私のやうな武骨者、女子衆が彼是れ申しませう」

「イエ、本當でござんすぞえ、ではもし本當にさうして心までも、命までも打込んだ女があつたら、貴下はどうなさいませぞえ」

「假令其のやうにいふ女子があつても、此の要之助は何とも思ひませぬ」情ない言葉にお舟はガツカリしたやうに首を垂れたが、

「それほどに貴下を思ふ女子があつても……」

「如何にも、此の要之助は性來女子は嫌ひでござる」思ひ切つたやうに言つて、吃度口を結んだ。

「エツ、女子は嫌ひ……」お舟の眼には涙が光つた。

「それでは要之助さん、お前は女子が嫌ひちやと言ふて、此のお舟も女子、私も嫌ひでござんすかえ」要之助はハツと思つた。つい口には言つたが、此のお舟には死にさうになつた命を助けられた恩義がある、其の恩義に對しても嫌ひだと言ふことは言へない、正直なことを言へば、お舟が自分を心から慕つて居ることは能く知り抜いて居る。お舟の母からもそれとなく此の土地に留まつてお舟と夫婦になつて、お舟を喜ばせてやつてくれといふことを言はれることもある。けれども其の親切さへも受け入れることを厭ふほどに要之助は女を嫌つた。お舟が慕へば慕ふほど要之助は唯心を痛めるばかりであつた、けれども流石にさうとはお舟には言ふことは出来なかつた。

「イヤ是は悪いことを申した、女子は嫌ひと申しても、お舟どのを何で嫌ひませう、貴下は私の爲には大切の恩人ゆゑ……」お舟は少し安心したやうに笑顔を作つて

「それでは外の女子は嫌ひちやと言ふのでござんすかえ」

「左様、左様でござる」

「では此の舟は嫌ひではござんせぬかえ」
「何で其方を嫌ひませう」

「嫌ひでなくば要之助さん、少しは私の心にもなつて呉れても宜さうなもの、お前は餘り情ないぞえ」お舟はピタリと側へ寄つて兩手を要之助の膝へ當て、ヂツと男の顔を見上げた。要之助は困つたと思つたが、手強く振放つことも出来ず、お舟の爲す儘にして俯向いて居た。

「私も獨身で立て通すことは出来ませぬ、早う婿を貰へと母さんが言はんすのを、今日まで過して来たのは皆なお前と夫婦になりたいばかり……漁に出れば浦の漁師達やお友達に、お前と夫婦になつたら好い一對の雛であらうの、似合の夫婦であらう、何日祝言をすると言はれる度に私の嬉しさ、それに引換へて要之助さん、お前は日頃の私への情なさ、私や濱の衆の戯ひに對してもお前と夫婦にならずに置けぬぞえ、どうぞ私の心を察して、モシ要之助さん、私のやうなものでも……」言ひ差して男の膝へ突つ伏して

しまつた。

(二) 女は縁ひの一鬚張

それでも要之助は女の身體へ手一つ觸れず、ヂツと坐つた儘考へに沈んで居たが、徐かにお舟を突退けて、

「阿母殿が歸ると悪い、離れて居なされ」お舟は涙に濡るゝ目を袖で拭ひながら怨めしさうに男の顔を見た。

「お舟どの、其方の親切は忝けないが、此の要之助には少し望みがある、其の望みを果すまではどうも女房を持つことは出来ぬ、——それに就てお舟どの、其方に頼みがある、私は和歌山の御城内へ奉公に上つて、武家で身を立たいといふ望み、それまでには三年の間の辛抱、其の辛抱をしたならば、其方の望み通り夫婦にならぬこともないが、それが出来ぬとあらば今日限り私のことは思ひ諦めて下され」と言つたのは要之助の考へ

では此の家を立退いたならば、去る者は日々疎して自分のことを忘れるやうになるであらうし、今此んなに焦れて居る矢先、三年の間待てと言つても待つ氣遣ひはない、斯うした難題を言つて一時を遅れやうといふ齟齬の考へに過ぎなかつた。

「エツ三年……三年……」お舟は眼を睜つて居たが、

「それでは三年経つたら、夫婦になつて下さいませうか」

「ア、三年の間待つたなら……」

「本當でござんすか……夫婦になることが出来るなら三年でも五年でも、屹度待つて居ります……けれどもお前其のやうなことを言つて、私を欺すのではござんせぬか」

「欺しはせぬ、欺しはせぬが、御城内へ御奉公をするとしても、何の傳手もない他國の者……」男は困つたといふ風、お舟は膝を摺寄せて、

「あるぞえ、傳手があるぞえ」

「傳手がある、アノ城内へ御奉公に入る傳手が……」

「アイ、それはな、死んだ爺さんの元御奉公をした小間物と油の間屋、和歌山の御城内へ小間物と油を一手で納める、それは、いかい立派な商人、父さんが死んで後も、お母さんや私も時々和歌山の市中へ行く時は、其の和泉屋さんへ寄つて、遊んで歸ることもござんす、其の和泉屋さんへ頼んだら、其の傳手で御城内へ御奉公の出来ぬこともござんすまい」

「オ、それは何より、それでは早速其の和泉屋殿とやらへ頼んでは下さるまいか」

「アイ頼んで上げは上げますが、要之助さん、御奉公をして居る間に、私のことを忘れては嫌でござんすぞえ」

「アハ、何と言ふやら、決して其方の親切は忘れはせぬ」

「イエ、私は案じられます、御城内には美しい腰元衆が澤山居るとのこと、お前は元お武士、其のやうな好い男を腰元衆が捨て、は置くまい、又お前も美しい女を見たら、私のことは忘れて……ア、案じられてならぬ、寧ろ御奉公は止めにして、何日までもい

「つまでも此處に居て……」

「アコレ聞分けのない、其のやうに人を困らせるならモウ此處には居られぬ、今日限り立退いて……」腹立たしさに云つた男の言葉にお舟は慌て、其手に縋つた。

「悪うござんした、勘忍して下さんせ、モウ何にもいはずに、三年の間待ちまする」

「それでは其の和泉屋さんとやらへお頼みして……」

「アイ、母さんが歸つたなら相談して……」

話の折柄母は歸つて來た。お舟は本意なさうに其座を立つて、母に要之助の望みを話した。母も末には娘と夫婦になつて呉れるものと思ふから喜んで、其の翌日和歌山の城下、和泉屋といふ小間物問屋へ來て、委細を話して要之助の上を頼んだ。和泉屋の主人の吉兵衛も承知をして兎に角暫らく其の方を家へお連れ申して置くが宜い、好い時機を見計つて御城内へお連れ申さうからといふことに、母も喜んで黒江へ歸つて來た。

城内へ奉公の傳手が出來て要之助の喜ぶに引替へて、お舟の落膽さは一通りではな

つた。別れを告げて要之助が、母に連れられてお舟の家を去つた跡ではお舟は唯一人、心行くまで泣いて泣き盡した。

お舟の話通り和泉屋は小間物、油などを一手で和歌山の城内へ納める數代連綿の老舗であつた。要之助は此の和泉屋へ引取られて食客の身となつた。けれども義理があるから其の當座は、時々黒江のお舟の所へ訪ねて來た。其の時はお舟は漁も休んで要之助を待遇した。歸つてしまふと跡は氣の抜けたやうになつて居た。

ト茲暫らく要之助は姿を見せなかつた。お舟は漁へも出ずに毎日蹲いで泣いてばかり居る。親の情で母親が見兼ねて、一日和歌山へ出て來て、和泉屋へ要之助の様子を見に來た。要之助は今商人の服装をして店に坐つて居た、母親の姿を見ると吉兵衛は、奥の座敷へ母親を招んだ。

「イヤ阿母どんや、能い所へ來て呉れた、實は私の方から明日あたりお前の所へ行かうと思つて居た所……」何か用でも起つたやうな口吻。

「ハイ、何か旦那様御用でございますか」

「イヤ外ではないがな、お前の家から遣した彼の要之助殿、段々話を聞けば元はお武士で、御城内へ御奉公したいといふのが望み、私も御城内へ御出入をするものゆえ、御世話をしやうと思ふが、お前も知つての通り中々紀州様は人出入が嚴重でな、減多に他國の人は御奉公には入れぬのぢや」

「ハイ」

「處で私も考へて私の家の店の者といふことにして、時には私の代理といふことで御城内へ行く分には差支ない、さうして居る内には、それ／＼係の御役人にも御懇意が出来れば御奉公も出来る道理、それや是やを思ふて此の頃ではな要之助さんに店へ出て貰つて、商賣の方も見習つて頂いて居るといふ譯ぢや」

「ハイ左様でございますか、何にいたしましたしても御奉公に上れるやうになれば結構でございます」

「處が阿母どん、困つたことが出来たのぢや」

「ハイ……困つた事とはどんなこと……」

「どんなことといふてな……アハ、ハ、誠に私の口からは言ひ難いが、娘のおいとぢや彼女が要之助さんに惚れ居つてな……マア打ち明け話ぢやが、他にも嫁の口があつたのぢや、婚にならうといふ者も澤山あるのぢやが、要之助さんゆゑにそれを嫌つてな、要之助さんと夫婦にならなければ、寧ろ死んでしまつた方が宜いなどいつてな、親の口から此んなことをいふのは誠に羞かしいが、實に困つたのぢや」

「ハイ……」それでは要之助が来ないのでお舟が心配をして居るが、此處の家の邊がある爲めに、要之助の氣が移つてお舟を見捨てたのかと思ふと、母は娘可愛さに要之助を憎く思つた。

「それでは、要之助さんをおいと様のお婚にでもなさらうといふのでございますか」若しさうだと言つたらお舟のことを言つて喰止めやうといふ勢ひでチツと吉兵衛の顔を見

た。

「サア私も娘がそれほど思ふなら、要之助さんと夫婦にしようと思ふてな、實は要之助さんに話をすると、私は望みのある身體、女房は持たぬ、女は嫌ひぢやと、イヤモウ色氣も素ツ氣もない断りやう、何と言つても女子は嫌ひの一罰張り、取り付くことも出来ぬのぢや、それを聞いて娘はガツカリして、此の頃では床に就いて居る始末、醫者が藥を勧めても服まず、要之助さんのことばかり言つて、彼の分では終ひには焦れ死でもするであらうと、親の身としては案じられてならぬのぢや、サアお前の所へ行つて相談といふのは此處のこと」

「ハイ……」

「聞けばお舟殿が濱から助けて来た御方のこと、あ前方の言ふことなら義理があるから屹度聞いて下さるに違ひあるまい、一つ其方からお舟殿から要之助殿に、是非に娘の婿になつてくれるやう、娘の命を助けると思つて承知をして下さるやうに、話をして下さる

まいか」

主人が思入つての頼み、母親は俯向いて考へて居たが、此の和泉屋のおいと、いふのも城下で評判の好い女、其の好い女のおいとが思ひ付いてさへ、女は嫌ひといつて要之助が断るところを見れば、三年の後には夫婦になるといふお舟への約束を守つて居て呉れるのであらう。ア、男らしい心と、思ふに付けてもおいとが其程の男を想ふのは尤もだ、お舟さへも命までもと打込んだ男だもの、おいとの慕ふのは當然、定めて本意ないことであらうと、自分の娘の心を思ふにつけておいとの切ない胸も察せられて思はず涙ぐんだ。

「お察し申します、さういふことなら私共から時機を見て、要之助さんにお話をして、纏まるやうにいたしませう」と心にもなく言つて母親は、和泉屋の主人に安心をさせて其儘和泉屋の家を出たが、世話になつた御主人の頼みゆゑ情なく断ることも出来ず、心にもない纏めるなどと言つて来たものゝ、此の縁談を纏めたなら娘のお舟は生きては居

まい。今日の話を言つて聞かせたならお舟の身に取つては一つ心配の種も殖えたやうなもの、定めし心を痛めることであらう、と思へば胸が一ぱいになつて、足も空に黒江の家へ歸つて来た。

(三) 嫉妬の焰

ある夜のことであつた、和泉屋の裏手の堀際に立つて、内の様子を探ふ一人の娘があつた、手には出双抱丁らしいものを手拭に包んだものを持つて居る、此の女こそ黒江の濱のお舟であつた。

母親から和泉屋の娘のおいとが、要之助を慕つて居るといふことを聞いて、要之助に對する溢れるやうな嫉妬の情は格氣の焰となつて、大事のく要之助さんを、寝取らうとするおいとめ、此の儘にして置いたら彼の美しい姿に心を移して、要之助さんが私を見捨てるやうなことになるうとも知れず、己れ嫉妬の敵、彼のおいとさへなくば……嫉妬の爲め

盲目となつたお舟は、唯只管においと憎らしさに、殺してといふ恐ろしい氣さへ起して魚を作るに使ふ鯨切庖丁を手拭に包んで、黒江から此の和歌山の城下へ来て、折からの暗を幸ひに、和泉屋の裏手から忍び入つて、おいとを唯一突といふ決心をした。戀ゆるお舟の心は鬼になつたのであつた。

驚の森あたりで鳴る鐘は重く、夜の空気を縫ふて響いて来る、サラ／＼と寒風は樹々の梢を鳴して吹いて行く。

ト和泉屋の裏手の堀の木戸はスツと内から開いて、出て来た一人の女があつた。四邊を見廻して居たが、内に向つて一寸両手を合せて拜んで居るやうであつた、お舟が見ると是は意外にも其女は和泉屋の娘おいとであつた。寝巻姿に掃帯を下げた儘素足で走るやうにお濱の方へ行く。お舟は事の意外に暫らくは立ちつくして居たが、聽て無心でおいとを追つた。おいととは京橋際の濠端へ来て、又四邊を見廻して居たが、人が来ないと見て、小石を拾つては袂の中へ入れて、聽て岸から中へ飛込まうとした。

今までは戀の敵、殺してと思つて居たおいが、身を投げやうとするのを身ては我を忘れてお舟は、庖丁を帯の間へ挟んで、つゝと走つ寄りて後からムツと抱き止めた。

「お待ちなさい、お嬢さん、お待ちなさい」

「イエ、どうか放して下さい、放して……」とおいとは手足を藻掻いて振り放さうとした、けれどもお舟は平常力業をして居るから、押へては却々放すやうなことはしなかつた。

「お嬢さん、どういふ譯で死ぬのか知れませぬが、お待ちなさい、私はお舟でござんす」

「エツ、お舟さん……オ、お前は黒江のお舟さん、面目ない、放して下さいまし」

「イエ、放しませぬ、どうして身を投げやうとなすつたか、譯を話して下さいまし、譯を聞いたその上で、死なねばならぬことならば、手傳つても殺して上げます、サア譯をお話なさいます」おいとはお舟の爲めに其處へ押しすくめられて、ワツとばかりに泣き伏した。

「サア泣いてばかり居ては分りませぬ……おいとさん、貴女が死なうとなすつたのは、若しや要之助さん故ではござんせぬか」

「エツ、ど、どうしてそれを……」

「知らないで何んといたしませう、屹度さうでござんせうな」憎らしい女めと云つた氣は言葉の中にも溢れて思はず力が籠つて、右の手は帯の間の出刃に掛つた。

「ハイ、御察しの通り、斯うなつては何も彼もお話しいたします、お舟さん聞いて下さいまし」

星一つ南から北へサツと飛んだ。

「お前の家から此頃來なんした要之助さん、羞かしながら私は初めて逢ふた其の日から慕はしうて、一日として忘れることが出来ませぬ、お父さんから私の心を打ち明けて家の婿にとお話しをいたしました、望みがある故女房は持たぬ、女は嫌ひぢやと情ない挨拶」おいとは袖を顔に押し當てヨ、と泣き出した。お舟は息も吐かず其の様子を見

詰めて居る。

「それも其の筈、段々出入の人の話を聞けば、要之助さんはお舟さんに命を助けられた義理もあり、お前さんの家に居る時から好い仲で、末は夫婦と堅い約束をしたといふことは、黒江の濱で誰一人知らぬ者もないさうな、それゆゑどのやうに私が思つても、要之助さんはお舟さんに義理立て、女は嫌ひぢやの一點張り、逃げて居るに違ひないとの噂、それを聞いて私はお舟さん、お前に濟まぬと思ひました、人の殿御に戀した私假令どんなに思つたとて、嫌はれるのは當然、とは言ふものゝお舟さん、女といふものは一旦斯うと思ひ詰めると、諦められるものではございませぬ、お舟さん、嗚お腹立ちでもござんせうが、私はどうしても要之助さんのことは思ひ詰めることは出来ませぬ、と云つてお前といふものがあつて見れば、迎も添ふことは出来ず、寧ろそのことに死んだが増しと、心を極めて死なうとしたのを、人にもよれお舟さん、お前に助けられるといふのは、何たることござんせう、お舟さん、私や助けられたが怨めしうござんす」と言

ひ終つてワツと又も泣き伏した。

黙つて聞いて居たお舟は思はずハラ／＼と涙を流した。

「お嬢さん、勘忍して下さいまし、勘忍して下さいまし、さうした貴女の心を知らず、私の大事の男を寝取る憎い女めと、正直貴女をお怨み申しました、男を取らるゝ口惜さに、寧ろ貴女を殺さうと……」

「エーッ」

「サア其の驚きは御尤もでござんすが、はしたない女の嫉妬から、コレ此の通り切物さへ持つて……」と言ひながらお舟は帯の間に挟んで居た出刃を取つてそれへ置いた。

「貴女の家へ忍入つて、殺さうとしたのでござんす、貴女の心も知らないで、此のやうな大膽なことをしやうとした心が羞かしくござんす、勘忍して下さいまし」お舟ははふり落つる涙を袖に拭つた。おいとは餘りのことに言葉も出ず、唯おど／＼と身を震はして居る。

「死なうと覺悟するのは能く／＼のこと、私が要之助さんを思ふ心も、おいとさん、貴女が要之助さんを思ふ心も同じでござんす、定めし切なうござんせう、けれど要之助さんと私とは、まだ好い仲には……」言ひかけてハツと顔を紅らめたやうであつたが、「人の噂は嘘でござんす、私が幾ら思つても、要之助さんはやつぱり、女子は嫌ひぢやと云ふて、永い間同じ家に居ても、やさしい言葉一つ掛けては下さんせぬ、三年待つたら夫婦になると、口では云へど心では、どう思つて居られるやら、ホンに怨めしい要之助さん」男の心の情なさに、お舟もチツと俯向いて考へに耽つた。

ヒューツと一しきり吹いて來る寒風は、身を切られるやうに沁み渡る。

「おいとさん、私は諦めました、要之助さんは貴女に差上げます、貴女要之助さんと夫婦におなりなさいまし」

「エツ、お舟さんとしたことが、マア其のやうなこと」

「イエ、貴女の切ない心を聞いては、同じ思ひの私は涙が出ます、私とても要之助さ

んを諦めることは辛うござんすが、私は賤しい漁師の娘、要之助さんは元は立派な御武家、身分違ひは不縁の基、後々辛い愛き目を見るでござんせう、貴女は立派な大家のお嬢さん、似合御夫婦……私から要之助さんに話をして、屹度夫婦にして差上げます」お舟の辛い決心を聞いてはおいとも、何と慰めやうもなく、唯涙に誘はれるばかりであつた。

折しも向ふに提灯の光、

「アレ彼の提灯は、お家から貴女を探しに來たのでござんせう」

「お舟さん、堪忍して下さいまし」

「イ、エ私こそ……二人はツと寄つて袴とばかりに抱き合つた。」

(四) 名ばかりの夫婦

「要之助殿、是ほどに言つても、其方は嫌と言はつしやるか」和泉屋の奥の間で主人の

吉兵衛は要之助を前に置いて斯ういつた。

「其方が女が嫌ひと言ひ張つて、娘との縁談を断るのも、お舟どのと約束したことを思へばこそであらうが、それは今言つた通り、お舟どのの其方のことを思ひ切つておいと戀を讀るといふ健氣な話、それを其方が嫌ぢやといつては、娘も死んでしまふといふし、第一命の恩のあるお舟どのに義理が濟まず、折角の志も無になるといふもの、どうか要之助どの、不東な娘ではあるが、おいと夫婦になつて下され」のつ引させぬ手詰の交渉。要之助は唯黙つて俯向いてゐる。主人はもどかしさうに「黙つて居るのは不承知か、飽まで嫌だといふなら是非がない、今日限り私の家を退いて貰ひませう、要之助殿、幾ら女が嫌ひぢやとて、餘り情ない仕打ではないか、少しはお舟さんや娘の氣にもなつてやつて下さい」果は愚痴に返つた主人の言葉、要之助はホツと息を吐き、「色々との御親切、決して悪うは存じませぬが、心に定めたことがございますので、皆さんの御志を無にいたしました、併しそれほどに思召して下さるお嬢さんのお心、如

何にも承知をいたしませうが、此の要之助が一つの願それをお聞届け下さいまするか」

「どういふ願か知らねども、娘と夫婦になつて下さることなら……」

「聞届けて下さいますか」

「聞届けもしませうが、して其の願ひとは……」

「お羞かしいが、お嬢様と夫婦になつても、それはホンの名ばかりのこと、夫婦の語ひはいたしませぬ、それを前から御承知を……」言差して流石に要之助も顔を紅めた。

「ナニ、夫婦といふのは名ばかりで、夫婦の語ひはせぬ……」呆れた顔をして吉兵衛は要之助を睨めて居たが崩れるやうに笑ひだした。

「アハ、マア、そんな事はどうでもよい、娘と夫婦にさへなつて呉れたら宜いのぢや……では承知だの」

「ハイ、それさへ承知なら、夫婦になりませう」

「ア、それで安心をした、日出度い、日出度い」主人の喜ぶ次の間に、ワツといふ女の

泣聲、それはお舟であつた。要之助はブル／＼と身を震はした。

それから間もなく要之助とおいと婚禮の式は行はれた。おいとは漸く思ひが通つて要之助と夫婦になつて喜こんだのも束の間、此頃又一間に入つては鬱いで居る。時には泣いて居る事もあるから、吉兵衛は不審の面色「おいと、何を泣いて居るのぢや、モウ夫婦喧嘩でもしたのか、エ、餘り早いではないかアハ、ハ、ハ、」おいとは怨めしうに涙の眼で父を見上げた。

「父さん、夫婦喧嘩などと氣樂らしい、そのやうなことではござんせぬ」

「では何で其のやうに泣いたり鬱いだりするのぢや」

「何でといふて父さん、要之助さんが、夫婦といふのは表面ばかり、少しも打解けて何しては下さいませぬ」

「ナニ夫婦といふのは表面ばかり、少しも打解けぬ……」ではやさしい言葉を掛けて呉れぬといふのか」

「アイ……」

「ウツ……尤も夫婦といふのは名ばかり、夫婦の語らひはせぬが承知かと、初からの約束ぢやつたが、それでは本當にさうかいな」

「東さんがそんな約束をするから、悪いのでござんす」

「悪いといふて、口ではさういつても、夫婦になつて仕舞へば、そんな事はないと高を括つて居たのぢやが、困つたなア……マア宜いわい、若い者のことぢや、要之助ぢやとて、木や石ぢやなし、其の内に打解けるやうにもなる、マア／＼其のやうに鬱がすに、能う機嫌を取つたが宜い、其方の待遇しが悪いのぢやアハ、ハ、ハ、」吉兵衛は笑つて濟ました、おいは一人胸を痛めて居た。

お舟はおいと切ない思ひを聞いてから、自分の戀を譲つて要之助を思ひ切つたもの、其れは心からではなかつた、夜が更けて獨り思ひに沈む時には、要之助のことを思つて涙に咽ぶ時があつた。さうして氣にかゝるのか、用に託けては和泉屋へ来て、おい

との様子を知ると、夫婦になつても要之助が、一度も打解けたことがないといふおいと、の縁言を聞いて、おいとを思つて歸つたものゝ、それでは要之助さんは私に義理を立て、居て下さんすのかと思つて、何となく勝利に誇るやうな心持になつて、言ひ知れぬ嬉しさは胸も躍るやうに覺えるのであつた。

(五) 勝利のほゝろみ

其の夜、要之助は、和泉屋の婿といふことを披露をして、和歌山の城内へ出入ることになつた。男は好し、調子は好し、商ひも上手であつたから、家中の局、腰元達は言ふに及ばず、男達にさへ氣に入られて、要之助の來るのを待つほどになつた。

中にも主君に劍術の指南をする相良彌左衛門といふ武藝者、元四國の浪人とか、近頃紀州家へ抱へられた男、三十五六の色飽くまで黒く筋骨逞ましい立派な武士であつた。此の彌左衛門が要之助を一方ならず最負にして、用はななくとも小屋へ呼んで色々の話に

時を移すことも度々であつた。要之助も此の彌左衛門の小屋へ來るのを楽しみにして居た。

「今日も要之助は城内へ小間物、油などを納めてから、彌左衛門の小屋へ來た。」

「先生、在つしやいますか」例も無遠慮に入つて來るから今日もズイと小屋へ入つて來ると、彌左衛門は太刀を引抜いて刃渡りを調べて打ち粉を打つて居る所であつた。

「イヤ和泉屋か、サア此方へ寄りなさい、今刀を調べて居た所ぢや」と言ひながら其刀をピタリと鞘に納めた。

「イヤどうも世も泰平になると、武器も使はぬから兎角錆が付くものぢや、用を立てる時がなくとも、時には手を入れぬといかぬものぢや」

「左様でございますな」と言ひながら要之助はデツと其刀に目を着けて居たが、

「大層お立派な刀でございますな」

「イヤ立派といふほどでもないが……和泉屋は好きかな」

「ハイ、私は商人でも刀などが兎角好きでございまして、拜見いたします」側へ膝行寄つて其刀を取上げて熱々見て居たが、要之助の顔の色は何故か變つて行つた。彌左衛門はそれには氣も付かず

「和泉屋、其方のやうにやさしい男でも、刀剣を好むとは妙ぢやな、其の刀の作が分るかな」要之助は我に返つたやうに、一寸頂いて其所へ置いた。」

「失禮ながら是は長光のやうに心得まするが……」

「ホ、一是は不思議、長光とは能う鑑定した、如何にも備前長船ぢや、一目見て斯うと見極めるとは中々のものぢや」

「恐入りまする、御家代々傳來の御品でございまするか」

「イヤ家傳來のものではない、此の刀に就ては、話があるのぢや」

「へ、一どういふお話が……」彌左衛門は一寸考へて居たが、

「和泉屋、貴様のことだから話をするが、決して口外をいたして呉れるなよ」

「ハイ、先生の御爲にならぬことなら、何で口外をいたしませう」

「では話をいたすが、斯う申すも異なるものだが、女の事から此の刀が拙者の手に入ったのぢや」

「アハ、先生、女の事など、御冗談でございますか」口に笑つても要之助は、此の話聞洩すまいとヂツと彌左衛門の顔を睨めた、

「イヤ冗談ではないぞ、實は斯ういふ譯ぢや、拙者は元阿波の徳島の城主松平阿波守殿の家來でな、相良彌兵次と申して居つたものぢや」

「オツ、阿波様の御家來……」要之助の眼は輝くやうに光つて息さへ喘むやうに見えた。

「さうぢや、處がな同藩の植松次郎兵衛と申す者の娘の菊野と申すのを、羞かしながら見染めて、どうか拙者の妻にと申入れた所が、どうしても菊野が承知をいたさぬのぢや

……和泉屋笑ふて呉れるな、眞のことぢや、段々様子を聞くと承知をせぬも道理、同藩の柘植權之助といふ者と許嫁とのこと、己れやれ戀の敵と……今考へて見れば誠に羞か

しい次第だが、其の時は一圖に女戀しさに其男が憎うて、其の權之助の小屋へ参り、誰も居らぬを幸ひ、油断を圖つて一刀の下に討ち果し、傍らにあつた此の刀、豫て自慢の長船と聞いて居つたから、逆もの序と、盗み取つて阿波の徳島を立退いたのが、今より二年前、今は斯うして當紀州家に仕へて居るが、時には徳島のことを思ふと、氣の毒の事をしたと思はぬこともない」要之助はチツと聞いて居る、其の下唇を屹度噛むやうにして……彌左衛門はそれには頓着なく、

「和泉屋、思へば女は敵ぢや、其方などは男が好いから、女には彼是言はれるであらうが、女ゆゑ身を亡ぼす者は澤山ある、其方も女は氣を付けたが好いぞアハ、ハ、ハ、」

「先生、それは眞のことでございますか」要之助は左の手に其の長光の刀を持つた儘チリ／＼と膝を進めた。

「何で偽りを申さう、其の刀が何よりの證據だ」

「それでは此刀は柘植權之介を手に掛けた時、盗み取つたのでござりまするか」要之助

の言葉は力が籠つて來た。

「コレ／＼和泉屋、其のやうな大きな聲で申すな」

「兄の敵ツ」と一聲叫ぶと見えたが要之助は、長光の一刀抜く手も見せず、彌左衛門の左の肩先バラリズンと斬り下げた、バツと散る血煙、彌左衛門は呀と叫んでドウと倒れた。

「和泉屋……あ、兄の敵とは……」

「黙れ彌兵次、今其方の口から申した、阿波家の家臣柘植權之介が修羅の怨みを晴す覺悟せよ」

「ヤア、扱は、其方は權之介の……」

「オ、要之助とは眞赤の偽り、眞は柘植權之介の實の妹梅ヶ枝、兄の敵を討たん爲め、男の姿となりて、汝の行衛を探ねし甲斐あつて、今汝の口より兄を殺せし悪事の次第を話せしも、皆亡き兄の靈の引合せ、遁れぬ所、観念せよ」呼はりながら又も一太刀斬り

下した一刀、女ながらも冴えた腕に、彌左衛門は虚空を掴んで息が絶えた。止めを差して手早く彌左衛門の鬚を切つて懐に納め、長光の刀血を拭つて鞘に納め、小間物の荷の中に入れて、其儘早くも城内を出て仕舞つたのを、誰一人として知る者がなかつた。間もなく此事が分つて家中は上を下への騒ぎになつたが、まだ要之助の所業であると気が付かなかつた。

和泉屋では其夜要之助が歸らないので、心配をして居る所へ、町の使屋の男に小間物の荷を負はせて一通の手紙が届いた。何事と披いて見れば

兄の敵相良彌左衛門事前名松平阿波守家來相良彌平次を討つて立退き候は手前にて候御縁ありておいと殿と夫婦に相成り候ても只の一度打解けしことの無之候もよろしく御察し被下度候詳しくは機を得て御目もじの節萬々申上り

柘植要之助事阿波守家來柘植權之介妹

梅ヶ枝

和泉屋吉兵衛さま

吉兵衛夫婦もおいとも此の手紙を握つたまゝ暫らくは人心地がないほどであつた。唯黒江の浦の登女のお舟は、此事を聞くと、ホ、ホ、ホ、と嘲けるやうに淋しく笑つた。

(をばり)

烈女千鳥

(一) 抜けば耻かし竹の中味

大阪櫻の宮の櫻は今を盛りに咲き亂れて居る。花を見ようとして往來人は織るが如き中に、只ある茶店の前は一ぱいの人立ち、酒に酔つた一人の武士、身には黒木綿の紋付、白縮小倉の帯を裾短に穿き、朱鞘の大小落し差し、髪は引詰めの大鬘に結つて額の抜き上つた様子は餘程劍術の修行をしたものらしい、大刀の柄に手を掛けて何やら罵つて居る。其の前には是も紋付とは言へど色は褪せ、紋は赤く汚れたる衣服、博多のボロくした帯、それでも大小を差して居るのは年頃二十五六の若者なれどお狛打ち枯した浪人風、大地に手を突いて頻りに詫びて居る様子であつた。酔つた武士は酒の上が悪いと見えて益々意地悪く言い募つて来る。

「コレ浪人、貴様のやうな奴があるから、兎角町人共が武士を侮るのだ、假令浪人いたしたればとて、茶店にて物を食ひ茶を呑んで置きながら、一文の持合せがないから勘辨いたせとは何事だ、武士たる者が食逃げをいたす積りか、貴様のやうな奴は捨て置く譯に相成らん、勝負をさつしやい、勝負をいたさぬか」浪人は只俯向いて居るのみであつたが

「仰せでござるが、勝負をいたすほどの腕前もござらねば、平に御容赦を願ひたうござる、御説は幾重にもいたす」

「ナニ勝負をするだけの腕前がない、コレ武士は何の爲めに兩刀を帯挾んで居るのぢや、イザ競争とあつたる時、第一番に敵陣に乗込んで巧名手柄をいたすがためだ、其の時に腕前がないから競争へ出られぬと云へるか馬鹿者め、いよく以て捨置き難き奴、サア立てツ、勝負をしろ」

浪人が温順なのに伴つて武士の方はいよく圍に乗つて罵つて居る、群衆は口々に武

士の面憎さを罵るもあれば、浪人の腑甲斐ないのに齒痒がる者もある。

「コレ抜け、抜けぬかツ」ツカ／＼と側へ寄つて浪人の刀の柄へ手をかけた。

「平にお許しに預りたい」と拒むのを

「エ、イ抜かつせへ、刀抜くことも出来ぬか」と言ひながらスラリと抜いたのは、明光くたる名刀と思ひの外、思ひも寄らぬ竹筥同様の作り物、武士は呆れて捻くり廻して居る、見物はドツト聲を揚げて笑つた、浪人は顔を眞赤にして氣極悪さうに俯向いて居る。武士は冷笑つて

「フ、ン……コレ浪人、此の刀は何ぢや、是が親から譲りの名刀か、斯様な竹光で人が斬れるか、見下げ果てた奴ぢや、「何だ此んなもの」足を掛けてビシ／＼と折つてそれへ投げ出し

「コレ眞の武士といふものはな、此のやうな名刀を差すものだ」スラリと自分の刀を抜いて浪人の眼の前へズイと突き付けた。

「どうぢや、竹筥とは違ふぞ、一度振つたら貴様如き意氣地無しの名マクラ武士の首なら五つや六つ、立ち所に落して見せるわ……勝負をしようと思つたが竹光では勝負も出来まい、命冥加の奴ぢや、今日の所は格別の慈悲を以て許して呉れるわ、卑怯者め、カ「ツブツ」青波を浪人の横面へ吐きかけた。浪人はムツとしたが、竹光の悲しさ、勝負をしたら、辱られてしまふに極つて居るから、無念を耐へて居る。

「口惜いか、口惜くば武士らしいことをいたせ、馬鹿めツ……」セ、ラ笑つて武士は浪人を後目に掛けて行き過ぎた。此の時講衆の中から出た一人の武士があつた、年頃二十四五歳、羽織袴の立派な扮装は何れかの藩中と見える、ツカ／＼と浪人の側へ寄つて

「御浪士、定めて御無念でござらう、餘りと申せば只今の御仁の致し方、失禮ながら御腕前に御覚えがござらぬか、それとも勝負をいたすだけのお覚えが……」浪人はホロリとして

「人に後れを取らぬだけの技は存じ居りますけれど、耻しながら此の竹光では……」

「然らば失禮ながら、身共の差料、永正の助定、お貸し申す、呼戻して勝負さつしやい」
「ナニ、御腰の物をお貸し下さるとな」浪士は思はず顔を上げて武士の顔を見た、武士は軽く頷いて腰の大刀を鞘ごと抜いて差出した。浪士は受取るとハラ／＼と涙を流した
「是さへござれば、御厚意は徒にはいたし申さぬ、御免」

押頂いて腰に差した、下緒を取つて手早く纏にした。

立上ると見えたがバラ／＼と行き過ぎた前の武士の跡を追つた。群集は

「ソレいよく斬合になるぞ、彼のお武士はお若いに似合はないお情け深いお方だ、行つて見る／＼」とバラバラ／＼と跡から同じやうに断けて行く、浪人は聽て追付いた。

「アイヤ待たつしやい」武士は振返つてデロリと見た

「何だ……今の素浪人、何の用ありて呼止めた」

「御望み通り勝負いたす、待たつしやい」

「ナニ勝負する、馬鹿めツ、竹光で勝負が出来るか」

「イヤ竹光にあらず、秘蔵の永正助定の一腰、貴公の刀が斬れるか、拙者の一刀が斬れるか、望みに任せて勝負をいたして遣はす」

「オ、ツ勝負をするか、何處で左様な刀を拾つて参つた。どうせ拾ひ物に碌な物はあるまい、止せ／＼」

「黙れツ、其の悪口、助定と聞いて怖氣が付いたか、卑怯な奴」

「ナニツ、卑怯だ、其の儀ならば勝負をして遣はす、覺悟をしろ」と言ふかと思へばスラリと引抜いた一刀、二人は互に中段に身を構へた群衆は其の周圍を遠巻きにしてしまつた。聽て尖先と尖先は合つたと思ふと、

「ヤツ」といふ鋭い浪人の聲、大言を吐いた武士は肩間を深く斬られたか、アツと叫んで後さまに挫と倒れた。忽ち浪人は飛込んで止めの一刀を刺してホツと息を吐いた、群衆はドツと聲を揚げて浪人の腕前を賞め、武士の口ほどでもないのを罵つて居る、浪人は刀の血を拭つて鞘に納めた、處へ刀を貸した武士は満面に笑を湛へてそれへ來た。

「御浪士、御手の内御見事々々、身共感服致した、口ほどもない脆い奴でござつた」浪人は恭しく刀を武士に返して

「御情により武士の面目も立ちましてござる、御恩の程決して忘却は仕りませぬ、手前は江州彦根、井伊家の浪人輻谷小藤太と申する者、浪人いたしたるも、酒のため、身の禍ゆる、酒を禁めいと近親の者の諫めも用ひず、只今彼れなる茶店にて、囊中一文の貯へもなきを知らながら、酒を飲みしが拙者の誤り、此の者のために罵られ、勝負を望まれましたるも、親の譲りの一刀は酒を飲みたさに、賣り拂ひ、耻かしながら間に合はせの竹光、是にては相手もならず、無念を耐へて居りましたるに、其許様の御厚志にて武士の面目を立てたる嬉しさ、肝に銘じて忘るゝ所でござらぬ、失禮ながら御尊名をお洩らし下されば忝じけなく……」武士はニツコリ笑つて

「左様でござつたか、手前は泉州岸和田岡部美濃守の家臣松井十左衛門の一子十藏と申すもの、餘りの雑言を見兼ねて刀をお貸し申したが、適れのお腕前……併しそれ程のお

腕がありながら、酒ゆるに身を過らるゝは御了簡違ひ、今後はお心を改めたら適れお役に立つべきお方、御心を付けられよ」

「忝じけなうござる」折から人の知らせに依つて役人が調べに來たが、松井十藏の證言、群衆が口々の話に依つて、武士の意氣地で斬つたことが分つて、小藤太はその儘何の咎めもなかつた。小藤太は幾度か禮を述べて十藏に別れた。

(二) 連れ美事弓術の技

此の事があつてから十五年の星霜は経つた、時は文政の七年、紀州和歌山の城主は紀伊大納言齊順といふ人であつた。此の人は非常に武藝が好きで折々馬場に於て槍劍弓馬の催しをして家中の中の技の勝れた者に賞を與へて、武術を奨励して居られた、五月の五日、端午の節句の當日、和歌山城内の馬場に於て流鏝馬の式を行ふと言ふ觸があつた。流鏝馬といふのは騎射の式で、馬に乗つて駆けながら弓で三ヶ所に置いてある的を

射て中てるので、却々勇ましいものであつた。當日になると弓術自慢の者は、我れこそ今日の晴の技に、適れ手柄をして主君の御賞めに預からうと、各々乗り馴れし馬、得意の弓矢を携へて、馬場を集まる、馬場には慢幕を張り廻らし、正面一段高き所には太守が大勢の家來を従へて出座になつて居る。打ち鳴らす太鼓に伴れて弓術自慢の若侍は、馬に乗つてドウ／＼とそれへ現はれ、順番に依つて式は始まつた、馬を走らせながら、遠くの的を狙つて射出す矢、一つ位は中るが三ヶ所残らず中る者は一人もなかつた。此の時主君の傍らに控へて居たのが家老次席の伊藤一郎右衛門といふ人物、當年四十五歳、弓矢を取つては紀州の家次第一であると言つても誇り、他人もさう許して居たほどの弓術の達人、けれども人間は悪い奴であつた。主君に向ひ、

「申上げます、今日の流騎馬の式に一人として満足に射かけた者のごさらぬは、若き者共の口頃の不鍛練、言ひ甲斐なき事でごさる、斯く申する一郎右衛門、見事三所の的射通して御覽に入れたく存じます」と申上げた、齊順も一郎右衛門の弓術の達人なことを知つて居るから、

「それは面白きことであらう、左りながら其方一人にては興がない、助太夫は豫て弓術が達人であるとのことちや、助太夫と二人して技競べをいたして見、助太夫どうちや」近習頭で河野助太夫といふ當年四十歳、劍術も出来るし、馬術も能く出来るが少しも白慢をしたことがない、何事にも穩かな人物であるから家中の評判が好い、齊順は此の助太夫の弓術の出来ることを若侍達から聞いて知つて居るから斯う言つたのであつた、けれども濃厚な助太夫は之を迷惑に思つた。

「仰せにはござりますが、弓術に掛けては家中第一の達人の名を取らるゝ伊藤殿と技競べなどとは思ひも寄らぬこと、此儀は何卒御免下さりますやう」と斷つた。一郎右衛門も此んな奴と技競べをしても勝つに極つて居るから詰らぬ、何で主君がそんなことを云ふのかと聊か不平に思つて居る。

「イヤ助太夫、卑下いたすな、其方は晴がましく申さぬが、家中の者からも其方の爲め

には養父の先代助太夫からも承つて居るぞ、遠慮いたすな、致して見せし二度言はれたから断り兼ねた。けれどもやる気はないから助太夫は只だ頭を下げて居た、と家老の水野土佐守といふのが、

「助太夫殿、主君の折角の仰せ御受いたさぬは却つて御無禮ぢや、伊藤殿に負けたとて耻辱にはならぬ、御受けいたして宜しからう」家老にまで勧められてそれでも嫌とは言ひ兼ねたから、

「然らば未熟ながら御覽に供へます」と云つた。助太夫が御受をしたから二郎右衛門益々不平だ。宜し、其の儀ならば我腕前を見せて、人々を驚かして呉れよう、どうせ助太夫は射撃して笑ひを招くに違ひないと思つて居る。茲で二人は支度に及んで、各々乗り馴れた馬を乗り出し、それに跨がり手馴れた弓矢を携へて馬場へ現れた。技競べと云つても一緒に一つの的へ射るのではない、一人が先へ馬を走らせて射て行く、跡から次の者が馬を走らせて来て射る、口で言ふと譯がないやうであるが、餘程の達人でなければ

ば中るものでない。主君を始め家来一同如何に相成るかと片唾を呑んで見て居る内に、先づ伊藤二郎右衛門馬の手綱を捌いてドウドウ輪乗を掛けて居たが、鏝に一角入れると等しく、ハイヨ……ドツドツと走り出した。續いて河野助太夫同じく馬に輪乗を掛け徐かに乗出したが、機を見てハイヨといふ聲と共にトウトウと駈け出した。一郎右衛門今や一の間近く來つたる時に弓に矢を番へ、キリキリと引絞りに近くよると見えたる時に、兵衛と切つて放したる矢、狙ひ違はずの眞只中を、射貫いたかと思ひの外、矢は外れて的の端の所へブツ……主君を初め一同アツと思つた。一郎右衛門南無三仕損じたりと思つたが、戻つて射直す譯に往かない、直ぐに二の的を射なければならぬ、續いて弓に矢を番へ、今度こそはと馬を走らせて來る。此の時助太夫の馬は一の的近くへ走つて來た、馬上の助太夫、弓に矢を番へ、キリキリと引絞り、呼吸を計つて兵衛と切つて放つた矢は、狙ひ違はず、一の的の眞只中へブツブツ中つた。主君を始め一同の家臣、射たりやな助太夫、遠れなりとあつてドツと聲を

揚げる。二の的に来たつた一郎右衛門、馬を走らせながらに此の度こそはと切つて放した矢、這は如何に是れも狙ひは外れての上を掠つて矢は向へ飛んだ、南無三と思つたが馬は遠慮なくドンドン走つて行く。助太夫の馬は廳で二の的に近く来た、呼吸を計つて放ちし矢は、中つたりな中央、又もドツと揚がる賞め聲。一郎右衛門は面目ない、切めて最後の的と思ふが、二度の失敗に心が焦つて矢筈が定まらない、切つて放した三の的も端を射通しただけ、續いて走つて来た助太夫、弓矢八幡を心に念じて、切つて放つた矢、狙ひは違はず是もの真只中を射貫いた。一郎右衛門は三つが三つとも中らぬに助太夫は其の三つを皆射通したから、暫しのほどは其の腕前を賞める聲は鳴りも止まざるほどであつた。一郎右衛門は悄然として控へる、助太夫は自慢をする所ではない、氣の毒さうに一郎右衛門を見て伏目勝に控へた。齊順は機嫌よく

「助太夫、見事であつたぞ、一郎右衛門が射貫いた的、三所共中央を射貫いたる腕前、弓を取つては其方の右に出する者はあるまい、それほどの腕前がありながら自慢がまし

く申さぬ段奥床しいことぢや、追つて褒美の沙汰に及ぶであらうぞ」

「ハ、ツ有難き仕合せに存じまする」

「一郎右衛門」

「ハ、ツ」

「不埒者め、日頃弓術に就ては我に上越す者はないと自慢を申して居るばかりか、今日も若侍共の腕前が未熟であると罵り、自ら見事に見せると申出でながら只今の態は何事ぢや、見苦しいぞ、餘り日頃から大言を吐かぬものぢや、未熟者めツ」散々に叱られて一郎右衛門は顔を眞赤にして俯向いてしまつた、是で今日の流鏑馬の式は終つた一郎右衛門は悄然として屋敷へ歸つた。助太夫は改めて御前で御酒下されがあつて、褒美として一口の短刀を頂いて、面目を施して御前を退つた。

(三) 咽喉を狙つて唯一矢

流鏑馬の式に不覺を取つたのも、自分の技の未熟であるのに一郎右衛門は却つて助太夫を恨んで、自分が御前で耻を擡いたのも助太夫である、何かあつたら此の恨みを晴らしてやらうと考へて居た。

夏も過ぎ秋は来て山々の木の葉は紅を染めた。一郎右衛門は二人の家來を連れて城下から半里ばかり隔たつた秋葉山といふのへ紅葉を見に行つた。高い山ではない、女にでも登れる位の山であるが、頂上には破れたる秋葉の社がある、満山燃ゆるばかりの紅葉、瓢の酒を酌み交はして詩や歌を作つて楽しんでゐたが、モウ日が暮れようといふ時分、見物の者も歸つて一郎右衛門主従三人になつた。歸城しようと思つた時、山の下を馬上豊に打たせて行くのは河野助太夫、東照宮へ参詣の戻りと見え、只一人の供を連れて居るばかり、之を見ると一郎右衛門ムラ／＼とした。口頭から何かあつたら恨みを晴さうと思つて居た助太夫斯ういふ時だと思つたから二人に何か囁いた。家來とても一郎右衛門の氣に入る位の者であるから、心立の宜くない奴に違ひない、氣取ら

れぬやうに、木の繁つた中へ姿を隠しながら下りて来た。一郎右衛門は社の横に奉納の弓の矢がある、之に目を付けて、手早くそれを下ろした、矢といつても鎌はない、短刀を抜いて先を尖らせ、弓の弦を張り直して忽ち矢を番へた、程好き所から狙ひを定めて兵弗と切つて放した。流鏑馬でこそ仕損じたが弓は上手な奴であるから、狙ひ違はず助太夫の咽喉を横さまにグサリと中つた。急所の痛手に「アツ」と叫んで控と馬から落ちた、供の仲間、驚いて近寄らうとする所へ、飛んで来た二の矢は、仲間の揺ツ節に當つて矢は向へ飛んだ、仲間はアツとばかりに驚いて、命あつての物種と、頭を抱へて逃げ出した。處へ二人の家來が出て来て止めを刺して仕舞つた、仕合せ好しと三人は素知らぬ顔して道を變へて屋敷へ歸つた。

助太夫の家ではモウ御主人の歸る時分と若黨の權平は、女關前を掃除をして居る所へ飛んで歸つた仲間の定助、

「ヤア權平どん大變だ／＼」

「何だ、定助ぢやアねえか、手前の大變も聞き飽きた、どうしたんだ」

「何うしたにも斯うしたにも大變だ、首がなくなつた」

「ナニ、首がなくなつた、誰の首が」

「誰の首つて乃公の首だ」

「何を言つてやアがるんだ、手前の首は付いて居るぢやアねえか……ア、手前の歸つ節がねえや、どうしたんだ」

「今權現様から歸り途、秋葉山の下へ來ると、矢がヒューツと飛んで來て日那様の咽喉へ中つて馬からお落ちになつたんだ」

「エ、ツ、」

「それから乃公が側へ寄つて介抱しようと思つたら又矢が飛んで來て乃公の頭へ當つたんだ、それから驚いて……」言葉が終らぬ中に權平ボカリー定助の頭を敲つた。

「馬鹿野郎、さうならさうと何故早く云はねえんだ、手前の首の話などを先にして居や

アがつて、飛んでもねえ野郎だ」ボカリー撲倒して權平は奥へ飛んで入つた。權平から急を聞いて用人岡田喜兵衛驚いて權平と一緒に秋葉山の所へ駆け付けて見ると、近所の百姓四五人で介抱して居たが、急所を深く射られて居るから最早息は絶えて居た。泣く泣く死骸を屋敷へ引取つた。助太夫の妻のおみつと、今年十五歳になる娘の千鳥は、父の死骸に取籠つて悲嘆の涙に暮れたが、今更返らぬと、直ぐに此の事を主君へ届けた。齊順も非常に残念に思つて色々曲者を調べさせたが、何の證據もないから誰に殺されたか分らない。殊に助太夫は不意に打たれて落馬したことゝて、双の柄に手を掛けて居なかつた日頃の心掛けに似合はぬことゝあつて、其の儘家は取潰しになつてしまつた。おみつは泣く泣く娘の千鳥を連れて和歌山の城中を立退いて、城下から一里ばかり離れた岡崎村といふ所へ來て、小さな家を借り日々悲嘆の涙に暮れて居た。

伊藤一郎右衛門は流鏑馬の式には主君の不興を被つたが、素より佞奸な奴で人に取入ることが上手であり、總てに氣の付く奴であるから、主君の機嫌を取結ぶことも上手で

あつた、此の頃では日夜君側にあつて、齊順の非常な氣に入りになつてしまつた。

(四) 敵は外に證據の印籠

助太夫の娘の千鳥は今年十五の小娘ながら親に似ぬ氣象の勝つた女、殊に父が討たれた無念は、小さい胸にも耐へかね、どうかして敵を知りたいものと、母に隠れては一里の道を城下へ來ては様子を窺つて居た。

「御母様、秋葉山でお父様を殺したのは、伊藤一郎右衛門だとのことでございます」
「ア、コレ……」母は四邊を見廻して

「千鳥や、決してさういふことを大きな聲でいふものでない、證據とてある譯ではなし、疎勿にも其のやうなことを言ふものではない」

「イエ、今日御城下へ行つて人の噂を聞きましたに、お父様の殺された時に、伊藤様は御家來と秋葉山へ紅葉の見物に行つたとのこと、して見ればお父様を殺したのは伊藤

藤様に違ひございません、伊藤様は日外の流籠馬の御式の時、不覺を取つてからお父様を恨んで居るといふことを……」

「コレ、千鳥、お前何を云ひなさる、伊藤様は家老御次席、今御城中でお殿様の御氣に入り、滅多に左様なことをいふものではありません、證據でもあらば格別、人の噂は當にはならぬ、母の前なら兎に角、他の人などに構へてさういふことをいふてはなりませんぞ」

「でもお母様、私は口惜うてなりません、子供ながらも父の討たれたを口惜いとて仇を討たうと苦心をするが、不憫や可愛やと思ふとおみつは胸は張り裂くばかり、堰き來る涙止めも敢えず、千鳥を確と抱きよめ」

「子供のお前でさへ口惜いものを、況して家は潰れ、お父様を討たれた此の母の悲しさはどのやうであらう……さりながら時節を待つて必ず敵は取つて上げるほどに、決して短氣なことをしてはなりません、まだ十四や十五の其方、疎勿なことをしたならば、却

つて伊藤様の爲めに、どのやうな日に逢はうも知れぬ、必ず短氣なことをして、母に嘆きを掛けて下さるな」言ふも涙、聞くも涙、母子は森とばかり取り纏つて暫しは泣くより他はなかつた。

それから四五日後のことであつた、伊藤一郎右衛門は主君の代参として高野山へ参詣することゝなつた、無事に参詣も済んで大勢の家來が従ひ、十餘人の僧侶に送られて今奥の石段を下りようとした時、木陰からバラ／＼と現はれた小娘、懐劍右手に抜放ち一郎右衛門の前へツカ／＼と来て

「親の敵、覺悟しや」と斬り付けた。此の小娘こそ助太夫の娘千鳥であつた。一郎右衛門はギョツとしたが、小娘一人のことであるから驚ろきもせず、忽ち其の懐劍持つ手をグツと押へた。大勢の家來や僧侶の立ち騒ぐを制して、

「アイヤお騒ぎあるな、仔細ござらぬ、高が小娘一人コレ女、其方は何者ぢや」千鳥は口惜さに身を震はし「お前の爲めに討たれた河野助太夫の娘千鳥、親の敵の一郎右衛

門、覺悟しや」と云ひながら振り放さうとするが、男の力で押へられて居るから身動きも出来ない。一郎右衛門ニツコリ笑ひ

「此の一郎右衛門を親の敵とな、健氣な奴、なれども其方の親 助太夫を討つたは此の一郎右衛門ではない、外にある、其の敵は此の方ならでは知る者もあるまい、其の方の孝心に愛て、話して聞かすこともある、身共と一緒に参れ、騒ぐことはない、騒いでは其方の爲にならぬぞ、サア刃物を鞘に納めたが宜い」手を放されて千鳥は、今一突と思つたが、敵は外にあるといふ意味有り氣の一郎右衛門の言葉、事に依つたら一郎右衛門が本當の敵を知つて居るかも知れない、是は一郎右衛門の話聞いた上のことにしてしようと、利口の子だけに早くも思案を定めて、懐劍を鞘に納めた。

「御作職、此の小娘に申し聞けることもござれば、御座敷を拜借いたしたい」

「承知致しましてございます」元の奥の坊へ戻つて、奥まつた座敷へ一郎右衛門を通した 一郎右衛門は外の家來を遠ざけて千鳥を側へ呼んだ。

「千鳥と申すか能くぞ親の敵を討たうと健氣な心、見上げたものぢやが、此の一郎右衛門を敵と尾け狙ふは心得違ひであらうぞ、一郎右衛門にはつやく覺えはないぞ」千鳥は口惜さうに涙を一ばい眼に溜めて一郎右衛門を見上げた。

「イエ／＼お隠しなされますな、父の殺された時、お前様は秋葉山へ紅葉を見に行かれたとのこと」

「ウム、如何にも身共は秋葉山へ、紅葉を見物に参つたが、見物の者は身共一人ではないぞ、城下の者もあつたぞよ」

「イエ／＼お前様は日外お節句に流鏑馬に不覺をお取りなされてから、父助太夫をお恨みなされて居るとのこと」

「ハツハ、／＼、」一郎右衛門は事も無げに笑つて

「扱々小娘とは云へ何れから左様の事を聞いて参つたか、假令流鏑馬の式に不覺を取らうとも、それは身共の未熟から、何しに其方の父を恨まうや、根もなきことを申すもの

かな」

「イエ／＼それに違ひござりませぬ、今になつて知らぬなど、御卑怯でござります」

「然らば此の一郎右衛門が討つたといふ、何か證據でもあつてのことか」

「サア證據とはござりませぬが……」

「證據なくして何しに敵と言はれよう千鳥、其方の父の敵は、實は一郎右衛門でない、先刻も云ふ通り外にある、之を見い」袂より取出した一つの印籠、千鳥の前へ差し出した。千鳥は印籠を取上げて見ると澤瀉の紋の金蔴繪がしてある。

「此の印籠は……」

「御家老水野土佐守殿の御所持の印籠、千鳥能く聞きやれ、日外身共秋葉山へ紅葉見物に参りし折、日も暮れなんとする頃、土地の者に行き會ひて、助太夫殿が何者かの遠矢に掛りて無慘の最期と承り、急ぎ其場へ参りし時は、早や死骸は引取りし後のこと、急ぎ歸る途、助太夫殿が殺されしといふ所より十間ほどの此方に、落ちて居つたは

此の印籠、して見れば助太夫殿を討ちし者こそ水野土佐守殿……と申すは大きな聲では申せぬが、近頃土佐守の舉動、合點往かざることも数多く、己れ御家の實権を握らず結構とまで陰言せらるゝ所より察すれば、清原潔白の助太夫殿が居つては何かの間に邪魔に相成る所より東照宮へ参詣の戻りを狙ひ、只一矢で射て取りしものと相見ゆる、それを存せしは此の一郎右衛門只一人、定めし其方や母が無念にやあらん、會うたる時は此の事を傳へて、敵を知らせて遣はさうと、今日までは是なる印籠、身を放したことはないぞ、何しに伊藤一郎右衛門、助太夫殿を手に掛けよう、眞の敵は水野土佐守殿、證據の品は是なる印籠、孝行に愛て、其方に遣はず、心して父の恨みを晴して宜からう」

「ハイ……それは眞でござりまするか」

「何とて偽りを申さう、なれども油断ならざる土佐守、必ず人に打明けて語るまいぞ、人に語れば却つて其方や母の命が危いぞ、時節を待つて恨みを晴すやういたせ」辯に任

せて眞しやかに話したから、まだ十五の小娘の千鳥は、證據の印籠もあることゝて一郎右衛門の言ふことを眞正だと思つてしまつた。

「右難う存じます、さういふことゝは知らず、御無禮をいたしました、御許しなされて下さりませ、此の證據があるからは、確かに敵は水野様、屹度恨みを晴しまする」

「オ、健氣々々、併し決して油断をいたすな、一郎右衛門も餘所ながら力を添へるであらう」

「どうぞお願ひ申しまする」

「それまでは決して人に覺らるゝな」

「ハイ……」

「一心とは云へ、能う此の高野の山まで参つた、母が心配いたして居るであらう、身共の供の中に加はつて、立歸つて宜からう」

「ハイ右難う存じまする」家來も僧侶も遠ざけての話であるから誰あつて此の事を知る

者はなかつた。聽て一郎右衛門は供揃ひを命じて、高野山を下つて和歌山へ歸つた。千鳥も其の供の中に加はつて和歌山へ歸ると飛ぶやうに岡崎村の我家へ歸つて此の事を母に告げた。一郎右衛門が千鳥に渡した印籠は、一郎右衛門が餘程以前に水野土佐守から貰つた品であつた。一郎右衛門には今の家老達を斥けて、自分が家老上席にでも坐つて紀州家の政治を自分の自由にしようといふ野心があつた。それを早くも見て取つたのは水野土佐守であつた。そればかりでない、どうやら助太夫を殺したのは自分であることも覺つたらしい、何かに付けて邪魔になるから機を見て之を亡きものにしようと思つたが、水野土佐守の勢ひといふものは大したものでも却々側へも寄れない、一つ間違へば附家老の安藤飛騨守(田邊の城主で紀州家の附家老であつた)と相談をして危害が自分の身に及ぶやうな事になる。人の手を以て殺すことは出来ないかと考へて居る矢先、助太夫の娘が毎日のやうに城下へ來て自分の様子を窺つて居るといふことを聞いた。是は幸ひと土佐守から貰つた印籠を種に千鳥をして土佐守を討たせやうと謀つたのである。謀

られたとは知らず千鳥は、家へ歸つて母に委細を語つた、けれども母は「土佐守殿が、助太夫殿を殺したなどは受取れぬ話なれど、此の印籠が證據とあつて見れば、何か深い仔細のあることであらう、決して短氣な事をしてはなりません」と千鳥を堅く戒めて居た。

(五) 廊下の隅に怪しき人影

三年の星霜は経つた、此の頃紀州家の家老水野土佐守の奥勤めの侍女に上つた千鳥といふ女があつた。年は十八、年頃とは云へ人の目を引く美しい容色、是ぞ河野助太夫の娘千鳥であつた。一郎右衛門は益々家中に勢ひを得て來たが、勢ひを得れば得るほど水野土佐守の眼は自分の上に注がれる、モウ我慢が出来ぬ、今の内に亡き者にして仕舞はなければ、自分の野心は遂げられないと思つた。一郎右衛門は自分の目的を遂げるには同志の者を多く語らなければならなかつたから、有らゆる手段を施して家中の心なき者

は皆自分の薬籠中の者とした。

中には近頃紀州家に抱へられた武藝者で忍術の心得もあるといはれて居る幡谷小藤太といふ者がある、いつか金子に倦かして此の者を自分の手に入れてしまつた、けれども小藤太は一郎右衛門を斯ういふ悪人とは知らなかつた。

「小藤太、其方に申付けることがある」一郎右衛門は小藤太を側近く呼んだ。「何事にござりまするか」

「豫ての約束、拙者の申すこと、何事に依らず、背くまいな」

「如何にも何かと御厚情に預かることなれば、身に叶ふことなれば……」

「ウム、當家家老の水野土佐守の首、打取つて來て貰ひたい」

「エ、ツ……御家老の御首」

「シツ……静かにいたせ、一郎右衛門些と望みあつて土佐守を生かして置けぬ、日頃其方に心を盡して遣はすも、斯ういふ時に役に立てよう爲め豫て身共の中付くること、

何事なりとも背くまいと申したことに偽りがなくば、承知いたして呉れい、それとも不承知とあらばそれまで、此方の眼識違ひ、其方の命は申受けるから左様心得る、承知か、否か、退答をいたせ」傍らにあつた大刀を取つて否と云つたら一刀の下にと身構へた。小藤太は考へた、成程豫て一郎右衛門には何か野心があると聞いたが、扱は紀州家を自由にしうといふ野心であつたか、斯ういふ奴なら世話になるではなかつたが、是まで何くれとなく自分に情を加へて呉れたから、又なき人と思つて親しくしたが、飛んでもないことをしたと考へた。斯う考へたまでは宜かつた、さうして此處で家の爲めに一郎右衛門を斬つてしまふやうなら此の小藤太といふ人も見上げた男だが、長い間浪人をしてただけに慾に目が眩れた。是は自分が水野土佐守を首尾よく斬つてしまつたら、一郎右衛門が家老上席になつて紀州家で羽振が好くなる、さうすれば従つて自分は紀州家で相當に役立つことが出来る。是は悪いことではあるが、少し位危い橋を渡らなければ大い事は出来ないと考へた。

「承知してござる。土佐守の首、打つてのけませう」一郎右衛門はニッコリ笑つて

「ウム、能くぞ承知いたしました」

「して其の手筈は……」

「今夜土佐守が母が七十七歳の祝とやらにて、日暮より祝宴を催すとのこと、身共も招かれて居る、必ず土佐守、酒に酔ふは必定、客の歸りし後、其方忍びの術を以て、土佐守の屋敷へ忍び、土佐守の首を只一刀に……」

「ハッ、承知いたしました」

「必らず油断いたすな」

「心得ましてござる」小藤太は引受けて自分の部屋へ歸つた。

水野土佐守の屋敷では、土佐守の母が七十七歳の祝とて家中の重立つた人々を招いて祝宴を開いた、数々の馳走に客は十分の歡を盡して歸つた。宴の果てたのは四ツ（午後十時）頃であつた。混雑にまぎれて幡谷小藤太は忍術を以て土佐守の居間近くへ忍び入

つて、人の目の付かぬ所に隠れて様子を窺つて居たが誰一人之を知る者はなかつた。土佐守は母の祝の盛宴に喜びの餘り、思ひの外に酒を過した、客の居る内は氣が張つて居たが、客が歸つてしまふと、一時に酔が出て自分の居間へ來ると倒れるやうに横になつた。他の侍女は座敷の跡片付に餘念なかつたが、千鳥は心に一物あるから絶えず土佐守から眼を放さなかつた、今酒に酔て部屋へ戻る後に付いて千鳥は土佐守の部屋へ來た。「轉寢を遊ばしては御風邪を召します、只今御床を召します、暫らくお待ち下さいませ」

「アイヤ千鳥、床よりも先づ水を呉れい、酒に酔ふた時は水が欲しうなるものぢや、急いで持つて參れ」

「ハイ、畏まりました」千鳥は座敷を出た。跡に土佐守は横になつた儘ウト／＼として居る。時分は好しと小藤太は拔足差足して忍び寄つた、今障字を開けようとした時に人の足音。千鳥は水を持つて座敷へ入つ來た、人が來ては折悪しいと小藤太は障子の陰に

身を隠して内の様子を窺つて居た。千鳥は枕邊にピッタリと坐つて茶碗に水を注いだ。「御前様、水を召上げませ」

「ウム……」土佐守は微かに返事をしただけでウトウトとして居る。

「お風邪を召します、お起き遊ばせ」と云つたが土佐守は尙ウトウトとして居る。千鳥は四邊を屹度見廻して其の眼を土佐守に移して暫らく見詰めて居たが、ニツコリ笑つて何時か手は帯の間に隠した懐劍の柄にかかつた。

(六) 己れ卑怯未練の奴

ギラリと光つた懐劍は、土佐守の咽喉を望んで一刺と思ひの外、落着いて居るやうでも今年十八の娘が、親の敵と思ふものから心が焦つた、手許が狂つて懐劍は土佐守の首筋を掠つて鼻をグサと刺した。酔つて居ても油断のない水野土佐守はハツと思ひながら右の手で千鳥の利腕を確と押へた。

「コレ何をいたす」南無三仕損じたりと千鳥は掴まれた手を振り拂はうとしたが、男の力で押へられた纖弱い女の力ではどうともすることが出来なかつた。土佐守は早くも起上つて

「コレ、其方は千鳥ではないか」

「ハイ」

「何で斯様な狼藉をいたす、何者にか頼まれて、此の土佐の首を斬る氣か」

「父の敵の土佐守殿、尋常に首をお渡しなされませ」

「ナニ、父の敵……コレ千鳥、狼狽へるな、短氣をいたすな、此の土佐は父の敵と呼はるゝ覺えはない、心得違ひをいたすな」

「イエ、御隠しなさるは御卑怯にございます、父河野助太夫の娘千鳥、父助太夫を秋葉の山下で遠矢に掛けたは貴方様……」

「ナニ河野助太夫の娘とな……」チツト土佐守は千鳥の顔を見詰めたが、徐かに押へ

た手を放して、

「千鳥、此の土佐は卑怯でないぞ、何として此の土佐を父の敵と申すか仔細を申せ」千鳥はハラ／＼と涙を流して、

「今より三年前の秋の頃、父助太夫が東照宮への歸り、秋葉山の下を通りましたを、遠矢に掛けたは土佐守様、其の證據は其の場に有りし是なる印籠、澤瀉の御紋散らしは貴下様の御召物、斯ういふ證據あるに、覺えないとは卑怯でござりまする」懐中より取出したる印籠をそれへ差出して土佐守の顔を見上げた。土佐守は其印籠を見て居たが

「如何にも予の所持の品であつたが、其方は此品を父の死せし傍らで拾ひ取つたか」
「イエイエ伊藤一郎右衛門様から敵は貴下と仰しやつて此の印籠を頂きました」

「ナニ伊藤一郎右衛門に……」土佐守は暫らく考へて居たがハタと膝を打つた。

「さうあらうさうあらう……千鳥、短氣をいたすな、此の印籠は今より四年以前、予が一郎右衛門に遣はしたものでござや」

「二エ、ツ……」

「扱々恐るべき奴は一郎右衛門、彼近頃我儘増長いたし、間好くば紀州の御家に手を掛けんず曲者、此土佐が確と睨んで油断いたさぬものから、一郎右衛門己れを恨み、此の印籠を樋に此の土佐を親の敵と申して、其方の手を以て殺さんといはしたる企み、憎みても餘りある奴、一郎右衛門こそ流鏑馬の式の不覺に助太夫を恨み、秋葉の山にて殺害いたせしに相違なしと此の土佐が睨んだ眼に違ひなく、卑怯未練の一郎右衛門……」土佐守は城中の方を暫し睨んで居たが、容を改め、

「千鳥能く聴けよ、其方の父助太夫は元泉州岸和田の城主岡部美濃守の家來松井十左衛門の子息十藏といひし頃、今より二十年前、此の土佐が媒介いたして、先代河野助太夫殿の養子といたしたものでござや、河野の家は此の水野の家とは縁續き、況してこの土佐が仲介して河野の家へ遣はした者、何で助太夫を殺さうや、土佐は卑怯に言ひ免れるのでないぞ、能く考へて見よ」

「ハイ……」言はれて見ると成程、土佐守の言ふことが尤もだ。印前は土佐守が四半以前に一郎右衛門にやつたものだと思つて見ると、一郎右衛門が殺して置いて、それを土佐守に嫁げようとしたものであらう、お母様の仰しやるにも、土佐守はお父様の御恩人、さういふことをする人でない、必らず短氣なことをするなと仰しやつてお果てなされたが、それでは矢ッ張り一郎右衛門がお父様を殺したのであつたかと思ふと、一郎右衛門に欺された口惜しさに、思はずそれへワツと泣き伏した。

「コレ聲が高いぞ、相分つたか」

「ハイ、私の至らぬ心から、一郎右衛門に欺かれたを眞と思ひ込み、殿様へ對して刃を向けましたは、重々私の誤り、御許しなされて下さりませ」

「ウム、分つて見れば土佐は何とも思はぬぞ……母は如何いたした」

「今から二年前、重い病で死にまして、今は頼りのない私一人……」

「それは不憫の至り、併し其方は孝心ものぢや、其の孝心に愛て土佐が、必ず敵は討た

せて遣はずぞ」

「ハイ、有難う存じまする」

「併し今の腕前では一郎右衛門の前へ出て、却々敵を討たうなどとは思ひも寄らぬ、明日より土佐が劍術の修行をさせて遣はず、擔ます修行いたして宜からうぞ」

「有難う存じます」

「事が分れば宜い、決して他の者に打明けまいぞ、サア人の目に付いては宜しくない、刀を鞘に納めて、其方へ參れ」

「ハイ、恐れ入りました」千鳥は落ちた懐剣を取上げて鞘に納めた。此の時障子の外、廊下の暗き小陰に様子を窺つて居た小藤太は、其儘消えるやうに土佐守の屋敷を出て、人知れず一郎右衛門の屋敷へ歸つた。さうして却々用心堅固で油断なく、土佐守を討つことが出来なかつたと告げて自分の部屋へ歸つた。

「ア、悪い事は出来ぬものだ、今土佐守の屋敷へ忍び込んだ時、自分より先に土佐守に

斬付けた千鳥とかいふ侍女は、一郎右衛門の殺したといふ河野助太夫の娘、土佐守の託に依れば其助太夫は元泉州岸和田の岡部殿の家來松井十藏殿……思ひ出せば二十年前、忘れもせぬ攝州櫻の宮で酒に心を奪はれて、攝州武士に耻辱を受けた折、永正助定の刀を貸して下されたは松井十藏であつた、其の爲めに武士を斬つて捨て、武士の面目を立てたも皆十藏殿の情け、御恩は今日が日までも忘れぬに、其の十藏殿が一郎右衛門の殺した河野助太夫殿であつたか、知らぬ事とは云ひながら、恩人の敵たる一郎右衛門の悪事に興して、土佐守殿を殺さうとしたことは我が一生の誤りであつた、此上は千鳥殿に力を添へ機會を見て一郎右衛門を討つて取らせるこそ、切めても恩人への義理、此身の罪滅し、刀の手前、然うしなければ武士が立たぬ一

情は人の爲めならず、小藤太は昔の恩義を思ひて、茲に堅く意を決した。

(七) 昔の恩 今の義侠 首尾好く本懐

翌年の五月、降りみ降らずみ五月雨の小嶺みなく、鬱陶しい天氣が幾日か續いた、此頃水野土佐守の邸へ人目を忍んで來ては、土佐守と千鳥に會つては、又人知れず姿を消す武士があつた、それは幡谷小藤太であつた。今日は朝から穗のやうな雨が降り續いて居る、夜の五ツ頃ほい、伊藤一郎右衛門の邸の裏手に一人の人影、身には簑を纏ひ、竹の笠を翳して四邊を窺つて居る、折しも裏手の堀の開戸は首も立てず開いて、中から現れた一人の武士、雨の中を氣をも着ず、四邊を見廻して居たが、聽て手招きをして其の人影を呼んだ、開戸の傍へ近寄れば武士は忍び聲、

「千鳥殿か」

「小藤太様」

「靜かに、靜かに」千鳥は頷いて小藤太の後へ尾いて堀の中へ入つた、開戸は元の様に閉された、と間もなく一郎右衛門の寢所の方に當つて「親の敵ツ」といふ聲が聞えて續いて「勇者ツ」といふ一郎右衛門の聲。幡谷小藤太の案内で千鳥は首尾好く一郎右衛門